南あわじ市文化財調査報告書　第11集

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅷ

２０１１年度　埋蔵文化財調査

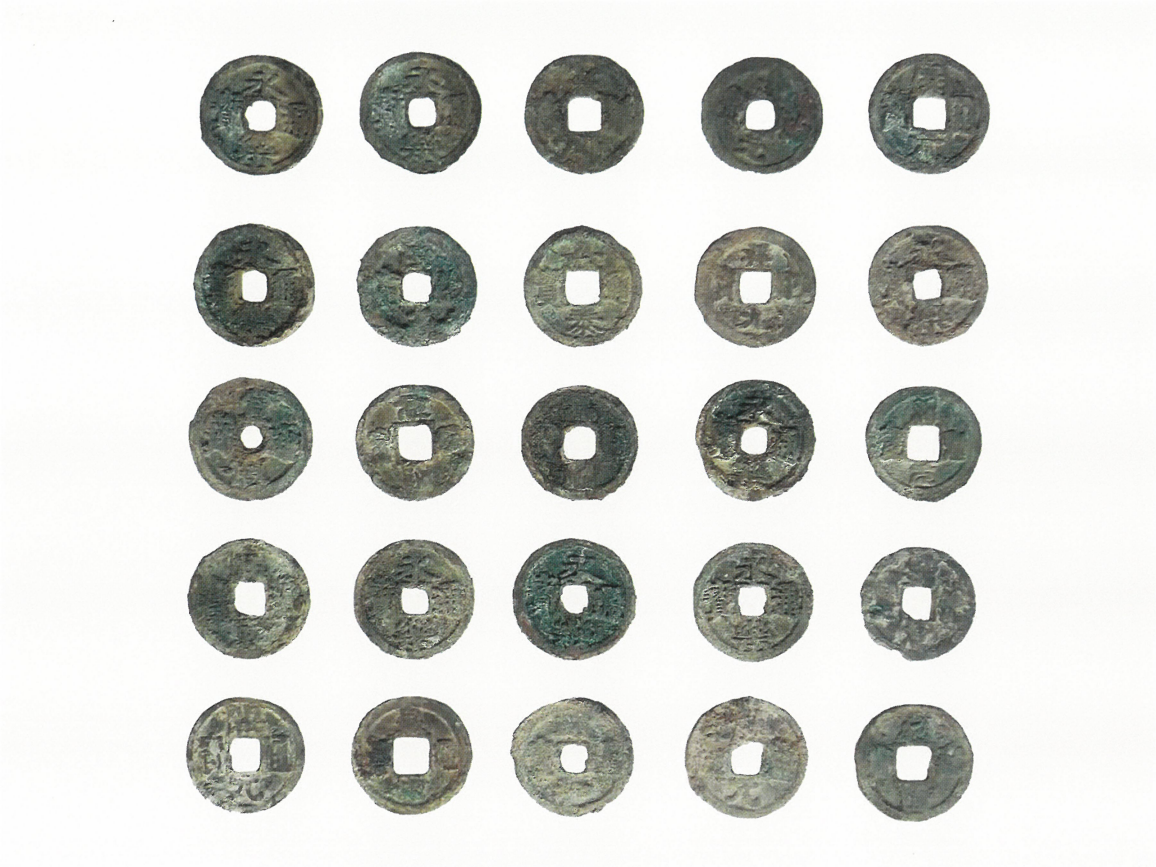
２０１５年3月

南あわじ市教育委員会

里丸山古墳群3次調査（上が北東）

里原田遺跡４次調査　８区（上が南東）

里原田遺跡４次調査　８区　出土瓦



里原田遺跡４次調査　８区　出土古銭

はじめに

南あわじ市では、このたび平成23年度の埋蔵文化財調査の成果概要を『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』として刊行する運びとなりました。

南あわじ市の埋蔵文化財調査は、平成に入り本格的に行われるようになりましたが、その大半は圃場整備事業に伴う調査です。当市は、１年を通じて温暖な気候と肥沃な農地を有する好条件が災いして、県内でも有数の農業地帯でありながら圃場整備を遅らせることとなり、平成23年度末の圃場整備率は約46％（兵庫県77％、淡路島41％）で、28年度末には達成率目標50％をめざし現在も圃場整備事業が盛んに行われています。

埋蔵文化財保護行政にとっては、まだまだ開発事業に伴う発掘調査中心の厳しい状況でありますが、一方で発掘調査によって新たな遺跡の発見など、歴史を紐解く発見や知見が増加し、色々な時代における当地の重要性が一層明らかになることは、誠に喜ばしいことです。

少子高齢化、過疎化が努力の甲斐なく急速に進展している地方にあって、より高い文化水準で魅力ある地域づくりをめざすとともに、郷土愛を育むうえでも地域の歴史をより明らかにし、後世に継承していくことが、今を生きる我々の重要な責務と認識しており、埋蔵文化財調査の必要性を実感しています。

今回刊行いたします年報は、湊里地区と阿万本庄地区の圃場整備に伴う発掘調査を行い、カマス遺跡や里丸山古墳群の新たな発見など、５つの遺跡調査から多くの成果を掲載しています。当年報は調査概要であるため十分な資料ではございませんが、今後もさらなる努力により地域史の解明と当市の文化財保護に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、厚くお礼申し上げます。

南あわじ市教育委員会
教育長　岡　田　昌　史

例　　言

１．本書は南あわじ市教育委員会が2011（平成23）年度に実施した、埋蔵文化財調査の記録である。
２．調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的崎薫が担当した。
３．出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・近藤紀子・島崎美佐代・白川裕二・富岡美早子・豊田亜希子・濱本善美・桝本早苗・松下矩之・三宅靖子が行った。
４．本書の編集は山崎が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧に記す。
５．各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、下記の方のご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。（敬称略）
伊藤宏幸・浦上雅史・岡本一秀・小谷徳彦・金田匡史・中村弘・森岡秀人

目　　次

巻頭写真図版

はじめに

例言

第１章　埋蔵文化財事業の動向 …… 1

第２章　埋蔵文化財調査の成果

第１節　埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図 …… 2

第２節　主な埋蔵文化財調査の成果

1　養宜館跡（３次調査） …… 3

2　里丸山古墳群（２次調査）・里原田遺跡（３次調査） …… 5

3　井手田遺跡（４次調査） …… 9

4　里丸山古墳群（３次調査） …… 13

5　里原田遺跡（４次調査） …… 19

6　カマス遺跡（２次調査） …… 31

第１章　埋蔵文化財事業の動向

平成23年度は確認調査５件、本発掘調査４件を実施した。確認339.3㎡、本発掘5,471.4㎡で調査面積合計が5,810.7㎡となり、発掘調査面積は微増傾向にある。年度内に本発掘調査を終了させる必要から、臨時職員２名の中途採用を行った。

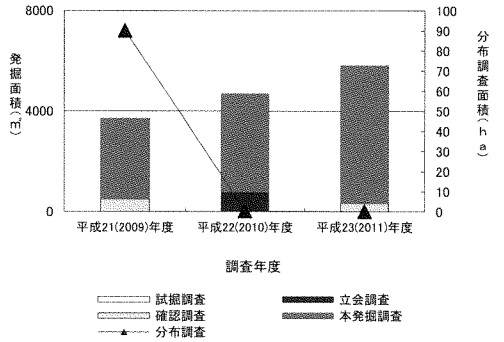
発掘調査は、前年度からの継続事業である経営体育成基盤整備事業の阿万本庄地区、湊里地区、特定環境保全公共下水道事業（八木榎列７号管渠布設工事）と新規事業である市道秋葉道２号線道路新設事業（阿那賀丸山地区）、民間事業２件を行った。

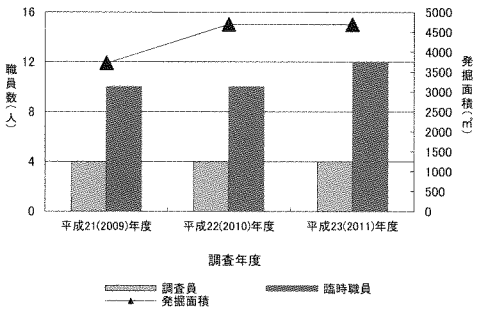
特筆すべき調査成果としては、湊里地区では前年度の里丸山１・２号墳に続き、３～13号墳の発掘調査を行い、里原田遺跡で平安時代と思われる寺院関係の遺構・遺物が確認された。

年　度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							調査員	臨　時
平成21(2009)年度	90.0	0	0	500.0	3,213.3	3,713.3	4	10
平成22(2010)年度	0.354	746.5	0	10.0	3,933.5	4,690.0	4	10
平成23(2011)年度	0	0	0	339.3	5,471.4	5,810.7	4	12

＊単位：分布調査(ha)調査面積(㎡)臨時の職員数はその年度ののべ人数

調査量と職員数の推移１





調査量と職員数の推移２

啓蒙普及活動としては、４月に前年度に発掘調査を実施した里丸山１・２号墳の現地説明会を行った。５月には倭文小学校と松帆小学校での出張授業、トライやるウィークで三原中学校から生徒３名の受け入れを行った。８月には里丸山３～13号墳の現地説明会、夏休み期間中の小学生を対象とした『わんぱく塾』では、市内４会場で勾玉作りと兵庫県立考古博物館へバスツアーを行った。

現地説明会の様子

展示活動としては、平成24年の１～３月にかけて『発掘調査速報展－平成21・22年度調査』を市内４会場で開催した他、教育委員会が所在する西淡公民館ロビーにおいてミニ展示を行い、年度内に計４回の展示物入れ替えを行った。

刊行物としては、上記速報展のパンフレット、『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ｖ』、『久保ノカチ遺跡』報告書の発行を行った。

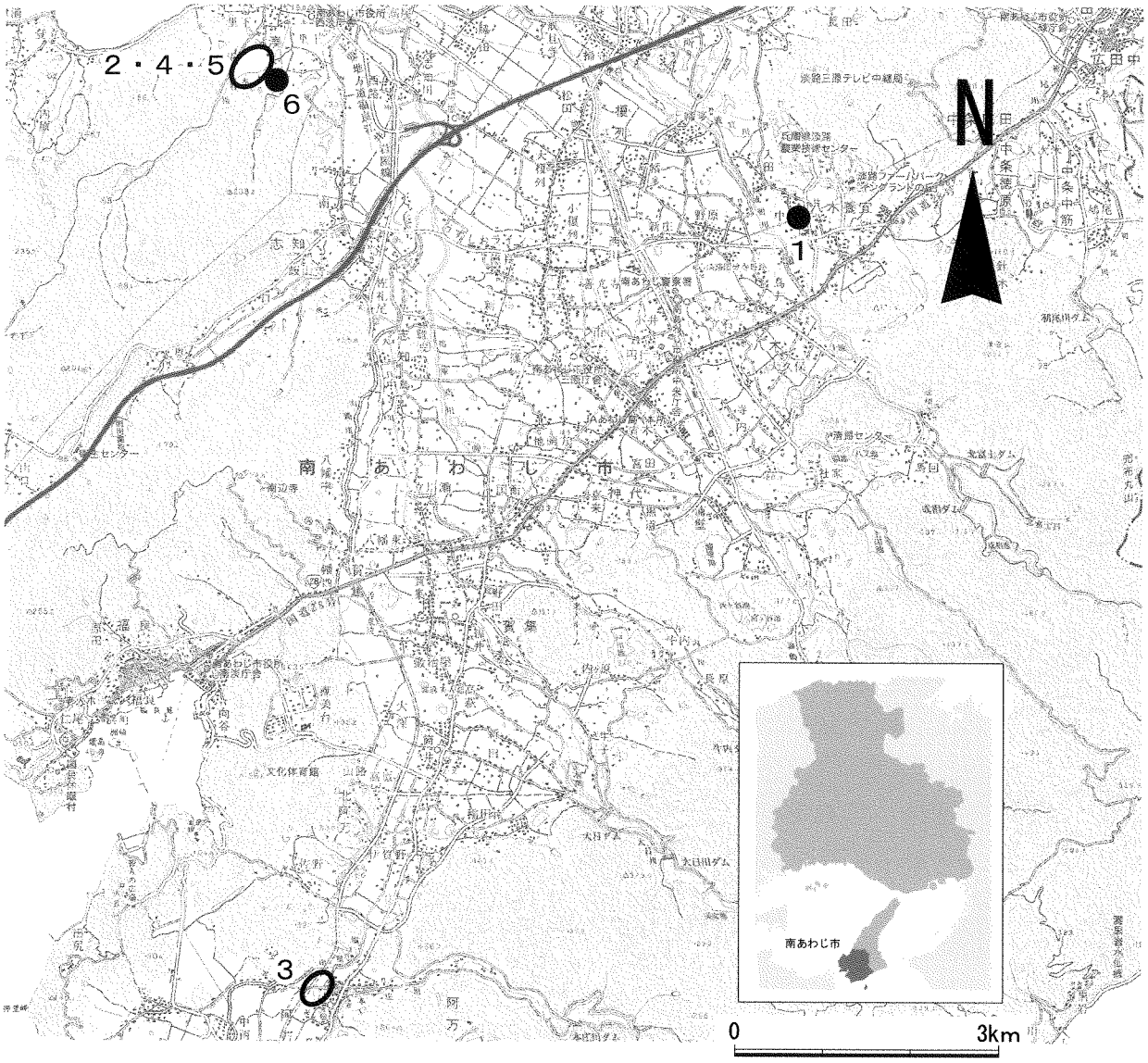
バスツアーの様子

第２章　埋蔵文化財調査の成果

第１節　埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図

No.	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地1	所在地2	調査期間	調査成果
1	特定環境保全公共下水道事業（八木榎列7号管渠布設工事）	確認	5.3㎡	坂口	養宜館跡	八木	養宜中	H23.4.25・5.31	中世の遺物確認
2	経営体育成基盤整備事業（湊里地区）	確認	300㎡	定松・的崎	里丸山古墳群・里原田	湊	里	H23.5.26～7.4	古墳と思われる石の集積と弥生時代の遺物確認
3	経営体育成基盤整備事業（阿万本庄地区）	本発掘	863.4㎡	山崎	井手田	阿万	上町	H23.6.22～10.14	室町時代の遺構・遺物確認
4	経営体育成基盤整備事業（湊里地区）	本発掘	375.4㎡	坂口	里丸山古墳群	湊	里	H23.6.28～11.17	6世紀末～7世紀後半頃の3～13号墳確認
5	経営体育成基盤整備事業（湊里地区）	本発掘	3,034.4㎡	定松・的崎・山崎	里原田	湊	里	H23.7.5～11.27	平安～中世の掘立柱建物、ヘラ描軒丸瓦、弥生時代終末期の土器等確認
	市道秋葉道2号線道路新設事業（阿那賀丸山地区）	確認	18㎡	坂口	丸山	阿那賀	丸山	H23.9.22	遺構・遺物未確認
	民間店舗建設事業（賀集八幡地区）	確認	12㎡	山崎	平松	賀集	八幡	H23.11.16	遺構・遺物未確認
6	経営体育成基盤整備事業（湊里地区）	本発掘	1,198.2㎡	的崎・定松	カマス	湊	里	H23.12.14～H24.2.9	古墳・平安時代の遺構・遺物確認
	民間開発事業（松帆西路地区）	確認	4㎡	山崎	大谷	松帆	西路	H23.12.21	遺構・遺物未確認

調査一覧表

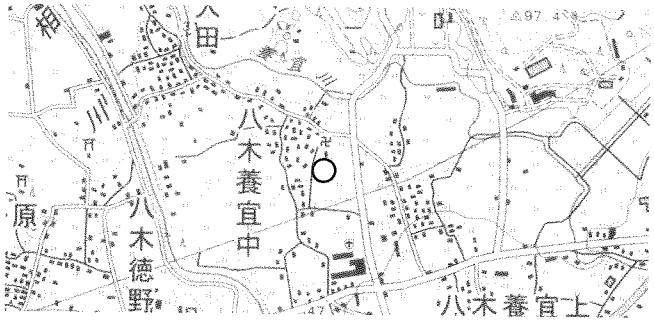


調査位置図

第２節　主な埋蔵文化財調査の成果

１　養宜館跡（やぎやかたあと）　－３次調査－

所 在 地　八木養宜中字居内外
事 業 名　特定環境保全公共下水道事業
　　（八木榎列７号管渠布設工事）
担 当 者　坂口弘貢
種　　別　確認調査
調査期間　平成23年４月25日・５月31日
調査面積　5.3㎡（２ヶ所）



調査の位置

１　調査内容

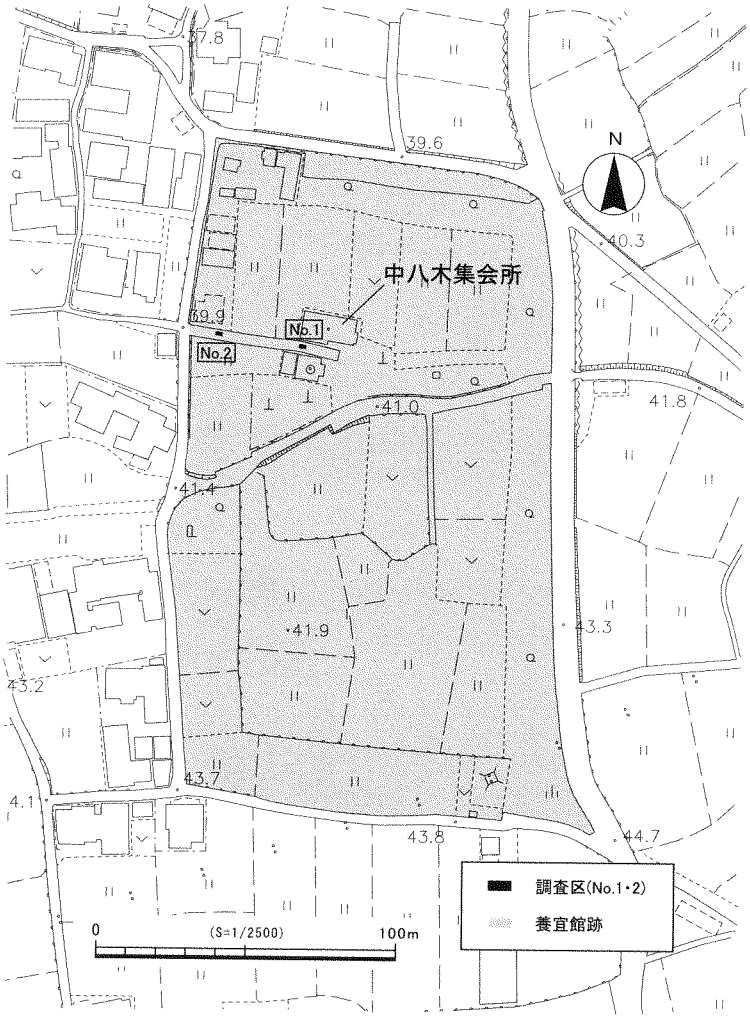
養宜館跡は、三原平野北東部養宜中地区に位置する中世の守護所とされる館跡である。現在館跡の東と北側には土塁が残り、県指定史跡となっている。今回この史跡内にある中八木集会所に接続する下水道の配管が計画され、史跡の保護と事業両立の可否を判断するため、地下の状況を確認する作業を行った。

調査地は、成相川中流右岸域の標高約 40ｍを測る既存道路部分からなる。調査は県教育委員会と協議及び指導を得た上で、下水道配管予定地である東端と西端部分に２ヶ所調査区を設定して作業を進めていった。

以下調査区の概要を記す。

No. １　現地盤より約 10 ㎝下に近世頃の遺物を含む礫混灰黄褐色 10YR4/2 土（２層）、その下に中世頃の遺物を含む礫混黒褐色 10YR3/2 土（３層）～礫混黒褐色 10YR3/1 土（５層）が堆積している。中世の遺物は比較的多く、土師器の皿類など供膳具の割合が高い傾向が認められる。

No. ２　コンクリートすぐ下に中世以前の遺物を含む礫混黒色 10YR2/1 土（３層）・礫混黒褐色 10YR3/1 土（４層）が堆積する。遺物包含層は、部分的な掘削であるが、古代の遺物を含んだ年代幅の広い層で、土師器皿



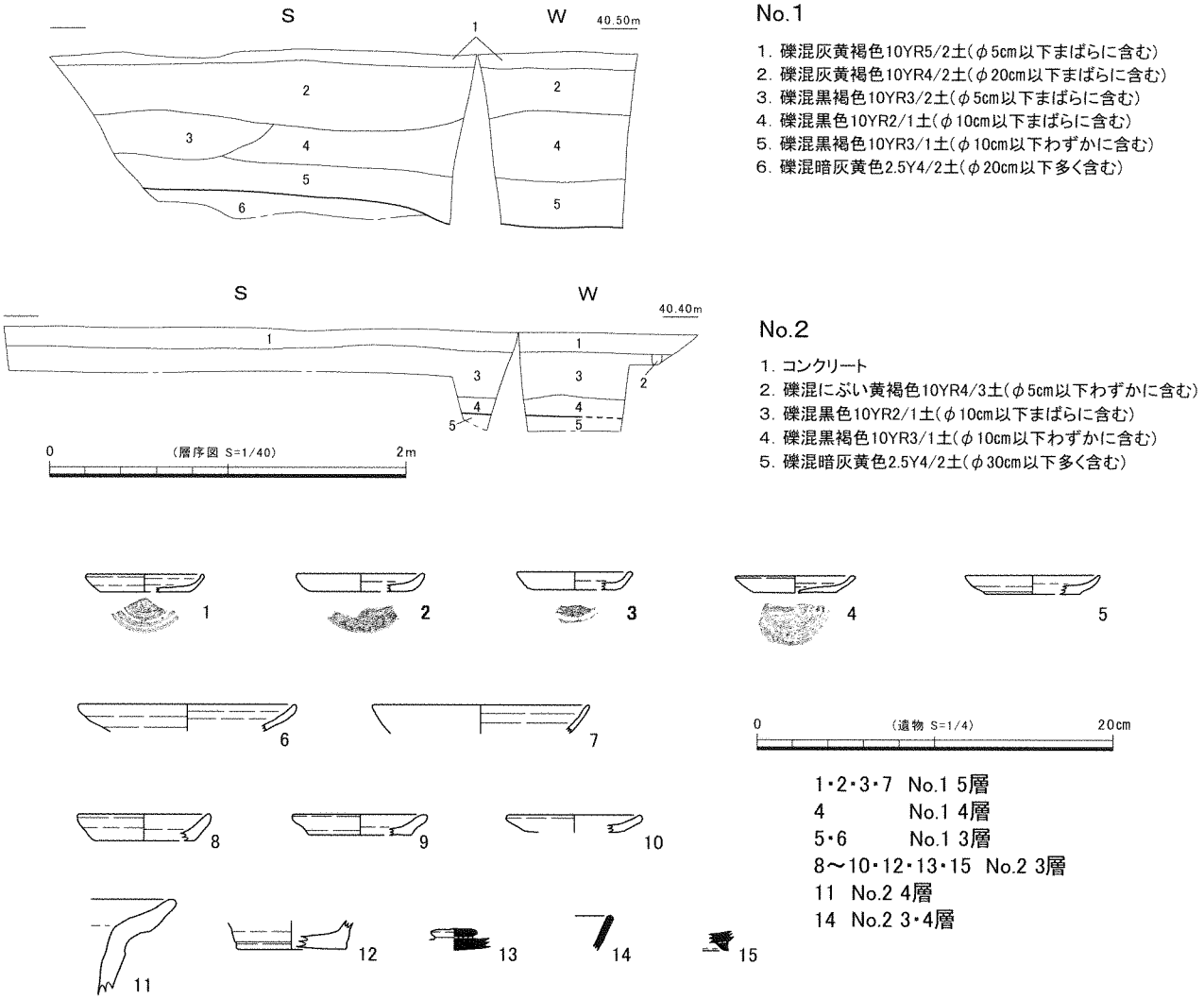
調査区設定図

など供膳具は器壁が厚く、No. 1調査区よりも古い傾向が認められる。

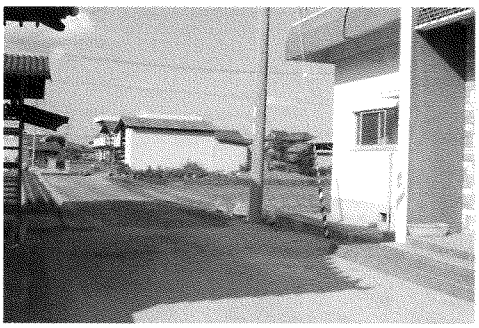
2　まとめ

本調査により、遺構は確認できなかったものの、中世の遺物包含層を確認することができた。詳細は、今後の課題として残るが、調査面積に比較して出土遺物が多く、周辺に遺構が分布するのはほぼ間違いなく、注意を要する。

（坂口）



調査区層序図・出土遺物

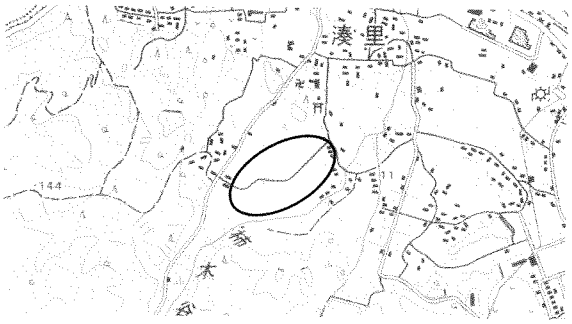


調査地近景（東より）

No.1南壁

2　里丸山古墳群（さとまるやま）　－２次調査－・里原田遺跡（さとはらだ）　－３次調査－

所 在 地　　湊里字原田外
事 業 名　　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　　定松佳重・的崎薫
種　　別　　確認調査
調査期間　　平成23年５月26日～７月４日
調査面積　　300㎡（トレンチ８本・２×３ｍ７ヵ所）

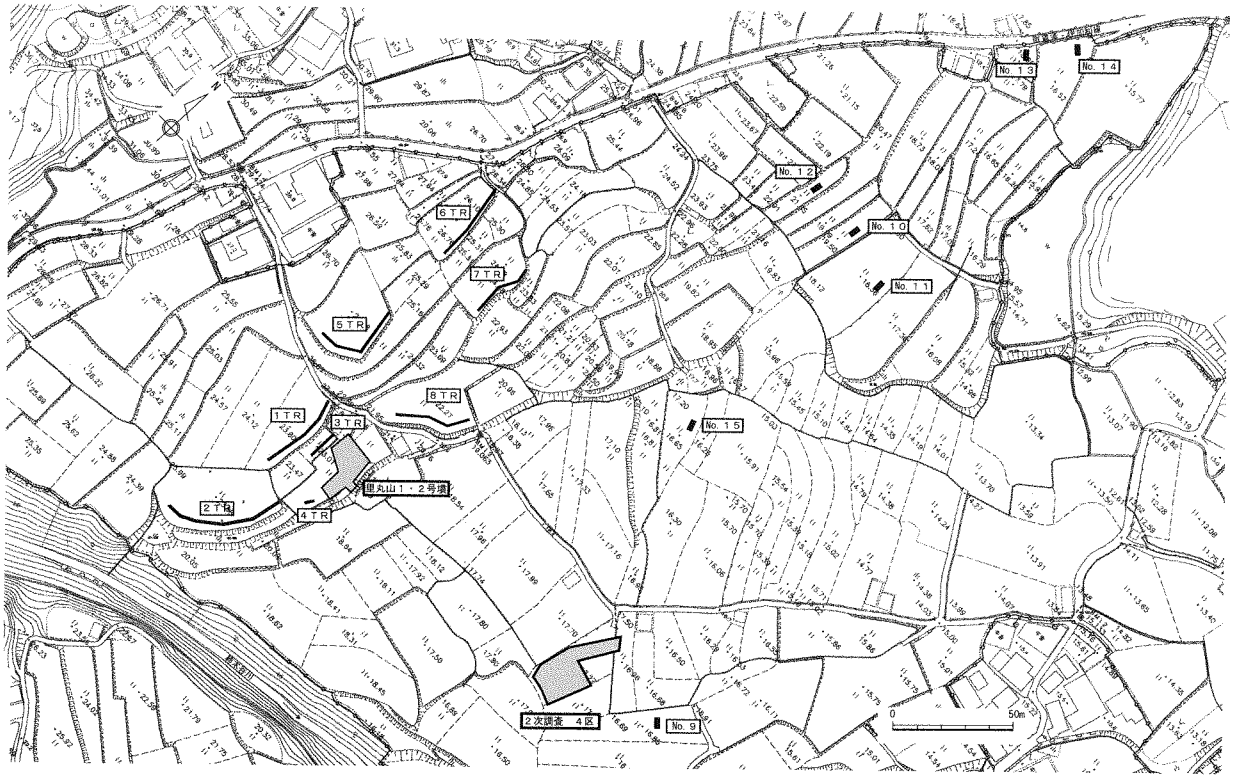


調査の位置

1　調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、大日川と三原川が合流する左岸に位置する。周辺には山の口古墳や式内社である湊口神社、叶堂城跡（室町時代）、後山遺跡（弥生・平安・室町時代）、湊城跡（室町時代）等遺跡が多く立地する。

平成21年度に遺跡範囲確認調査を実施し、その結果を基に平成22年度に本発掘調査（２次調査）を実施したところ、古墳時代後期の古墳（里丸山１・２号墳）が確認されたことから、周辺に群集墳の包蔵の可能性があったため、追加の確認調査を行った。１～４トレンチは里丸山１・２号墳と同じ張り出しに、５～８トレンチは北側にある別の張り出しに設定した。また、平成21年度の確認調査において作物の植え付けなどの関係から調査を実施できなかった圃場（№.９～15）も調査を行った。



調査区設定図

［１トレンチ］

里丸山１・２号墳の斜面上方に設定した。北端は客土による圃場の拡張が行われており、遺構は未確認である。調査区中央より南では溝状遺構を３条確認した。遺構から遺物は出土していない。包含層からは僅かに土師器と須恵器が出土している。

［２トレンチ］

里丸山１・２号墳の南西に設定した。里丸山１・２号墳と同様に古墳の築造に適した丘陵張り出し部にあたる。集石を５ヵ所、溝状遺構を８ヵ所確認した。群集墳の有無の確認調査であるため、集石部分は掘削していないが、溝状遺構はサブトレンチを入れて性格の把握に努めた。遺構１が円を描く溝であったため西側にもトレンチを設定したが、周溝と判断できる要素はなかった。遺構４は溝で、Ⅱ型式６段階～Ⅲ型式１段階（中村編年）頃の須恵器坏が出土している。遺構５・６は平行に走っており、横穴式石室の石を抜き取った痕跡と思われる。７～８区にかけて近接した集石２・３を確認し、集石３では明瞭な石の並びを確認した。他の集石群は等高線に直角に石の並びを確認していたが、集石５は平行に確認した。

［３トレンチ］

里丸山１・２号墳のすぐ西に設定した。耕作土直下が地山であり、遺構・遺物ともに未確認である。

［４トレンチ］

里丸山１・２号墳と同じ圃場の南端部に設定した。圃場造成時の客土のみで遺構は未確認である。遺物包含層が僅かに残っており、Ⅲ型式１段階頃の須恵器坏などが出土している。

［５トレンチ］

２区で石列を確認したが対応する石列がなく石室とは判断しなかったが、石室の可能性は考えられる。性格は不明である。

［６トレンチ］

溝状遺構を４条、土坑を２基確認したが、遺物に乏しく時代の判別は不可能である。土坑２基は切り合いが見られた。溝５は上層から掘り込まれていることや埋土から、比較的新しい遺構の可能性がある。溝６は幅1.5mの浅い溝で、土師質土器片が僅かに出土している。

［７トレンチ］

土坑状遺構１基、溝状遺構３条を確認した。遺構から遺物は出土していない。遺構４は上層から掘り込まれる遺構で、埋土から新しい遺構の可能性がある。北端部では炭化物が集中して確認された。

［８トレンチ］

遺構・遺物ともに未確認である。

№9　壁面で溝を確認した。幅２m、深さ0.5mを測る。３層からは古墳時代初頭の二重口縁甕、溝（４・５層）からは弥生時代終末の甕や壺が出土している。

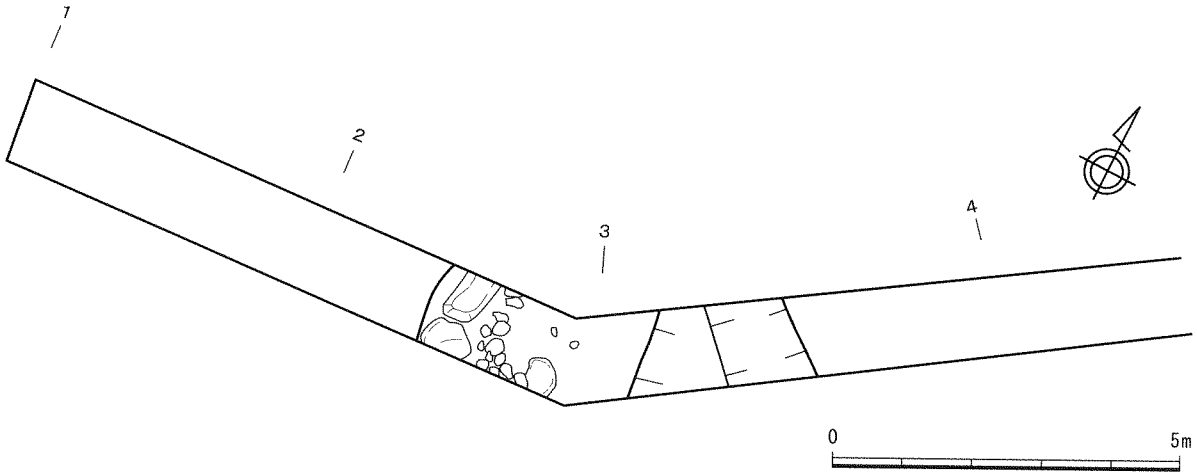
№10～15　遺物の出土は少なく、遺構は未確認である。

２　まとめ

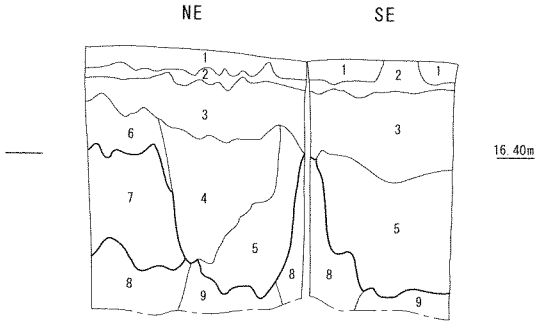
調査の結果、２トレンチで古墳と思われる集石部分を確認した。集石１～５・遺構５・６が石室、遺構２～４・７・８がそれぞれに付随する周溝になると思われる。また、４トレンチからは２号墳と同時期の７世紀前半の須恵器が出土しており、２・４トレンチ周辺に古墳群の包蔵が想定される。

平成22年度の本発掘調査（２次調査）４区では、段丘下で弥生時代後期～古墳時代の土器が多く出土しており、段丘上に展開していた遺構を削平して盛土を行ったためと考えている。４区の東部に位置する№.９で確認した溝状遺構は削平を免れた遺構であり、これまでの調査では確認できていないが周辺に弥生時代終末期の生活遺構が存在する可能性は高い。

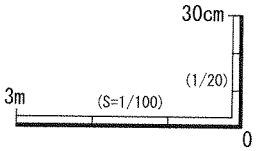
（定松・的崎）



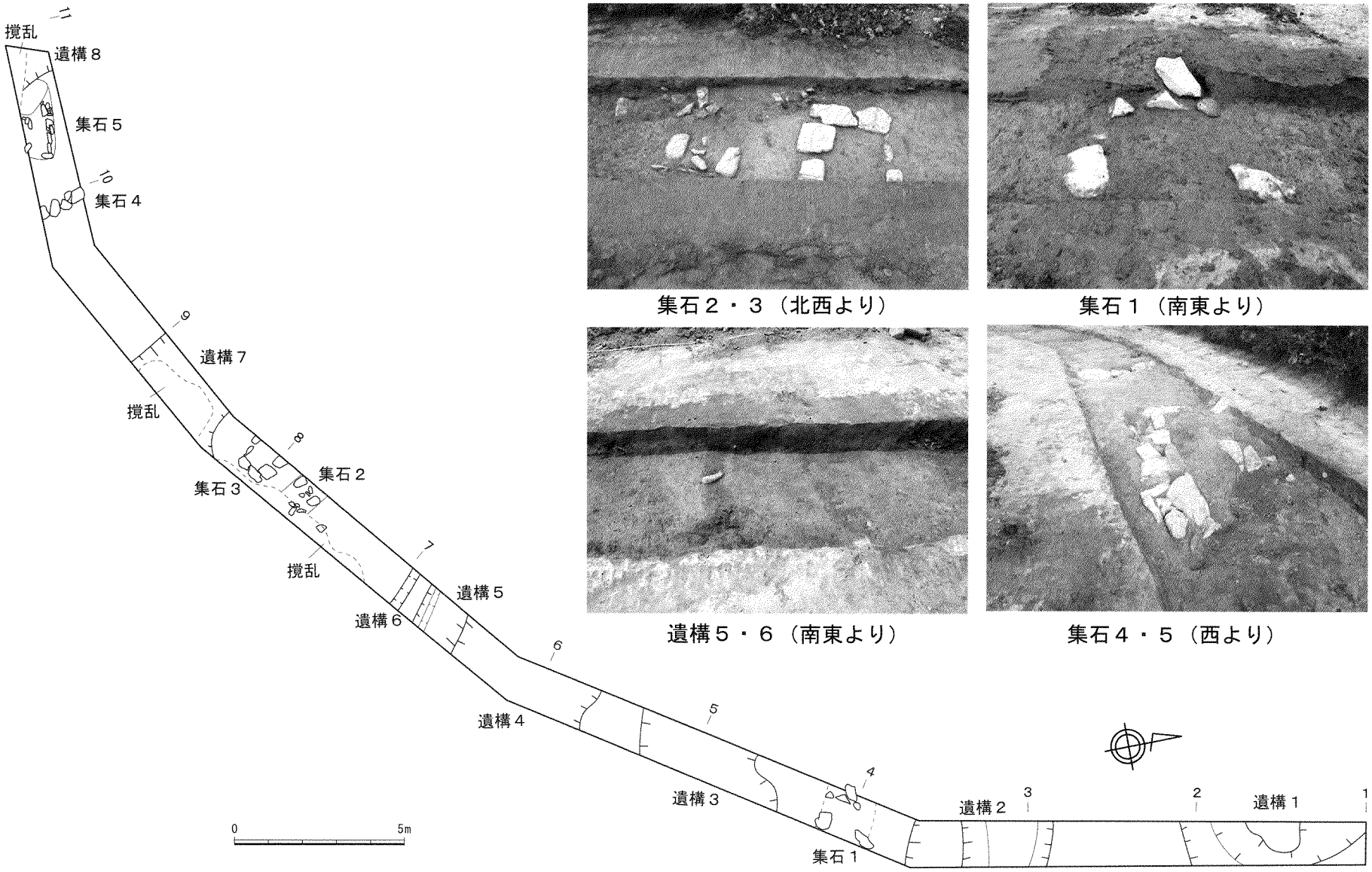
５トレンチ　平面図



１．黄褐色10YR4/6粘質土＋２層
２．黄褐色2.5Y5/3粗砂（小腐り礫まばらに含む）
３．にぶい黄褐色10YR5/3粘砂質土（Mn・遺物含む）
４．オリーブ褐色2.5Y4.5/4粘砂質土（遺物含む）
５．オリーブ褐色2.5Y4.5/5粘砂質土（遺物含む）
６．礫混黄褐色2.5Y5/3粘砂質土（φ5cm以下腐り礫含む）
７．黄褐色10YR5/6粘土＋灰黄褐色10YR6/2粘土
８．礫混にぶい黄褐色10YR5.5/4粘質土＋灰黄褐色10YR6/1粘土
（φ15cm以下礫・腐り礫含む）
９．礫混暗灰黄色2.5Y5/2粘質土
（遺物・φ15cm以下礫・腐り礫多く含む、湧水）



Ｎｏ．９　層序図



集石２・３（北西より）

集石１（南東より）

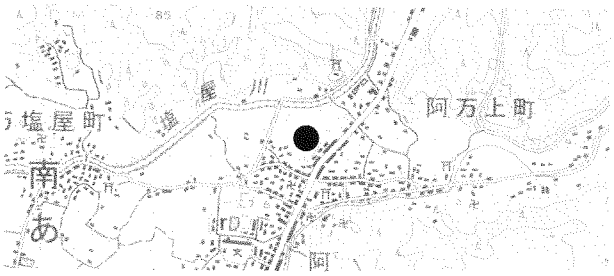
遺構５・６（南東より）

集石４・５（西より）

２トレンチ　平面図

3　井手田遺跡　－４次調査－

所 在 地　　阿万上町字中田内
事 業 名　　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　　山崎裕司
種　　別　　本発掘調査
調査期間　　平成23年６月22日～10月14日
調査面積　　約863.4㎡



調査の位置

1　調査内容

当遺跡は南あわじ市の南端、塩屋川によって形成された標高１～14mの低平な沖積地から扇状地末端に位置する。調査地の北方向には中世の山城と伝えられる郷殿城跡、東方向には弥生時代後期～終末期・中世の河内遺跡、西方向には平安時代末と伝えられる塩屋古城跡や弥生～平安時代の初田遺跡などが分布する。

平成16年度の当事業に伴う分布調査により遺跡の存在が明らかになり、平成18年度には兵庫県教育委員会によって主要地方道洲本灘賀集線（阿万バイパス）道路改良事業に伴う確認・本発掘調査が行われ、弥生時代～中世の複合遺跡であることが明らかになった。平成20年度に当事業に伴う確認調査（１次調査）を行い、その結果に基づき、平成21・22年度の本発掘調査（Ａ～Ｃ地区）に引き続いて当調査（Ｅ－１・２地区）を行った。

当調査では、中世の柱穴・土坑・溝等を検出した。柱穴から掘立柱建物８棟が復元された。

建物１　母屋部分が梁行２×桁行３間で約27.7㎡、四面に庇が付属し、総床面積が49.5㎡を測る。建物群中最大規模の総柱建物である。方位はN80°Wを示す。

建物２　梁行２×桁行３間で総床面積約17.2㎡の側柱建物である。方位はN11°Eを示す。

建物３　母屋部分が梁行２×桁行２～３間で約17.8㎡、北・西側に庇が付属し、総床面積25.3㎡の側柱建物である。方位はN６°Eを示す。

建物４　母屋部分が梁行２×桁行３間で約28.0㎡、南側に庇が付属し、総床面積は約31.8㎡の総柱建物である。方位はN７°Eを示す。

建物５　梁行２×桁行２～３間で約8.1㎡の側柱建物である。柱穴の並びから建物４の庇とつながっていた可能性がある。方位はN７°Eを示す。

建物６　母屋部分が梁行３×桁行３間で23.4㎡、北・西側に庇が付属し、総床面積が約40.5㎡の側柱建物である。方位はN77°Wを示す。

建物７　母屋部分が梁行２～３×桁行４間で27.5㎡、東・北・西側に庇が付属し、総床面積が約48.7㎡の側柱建物である。方位はN78°Wを示す。

建物８　梁行１×桁行２間で約3.3㎡の小規模な建物である。建物３北側の庇に柱が通ることから、同時期の建物と推定される。方位はN83°Wを示す。

2　まとめ

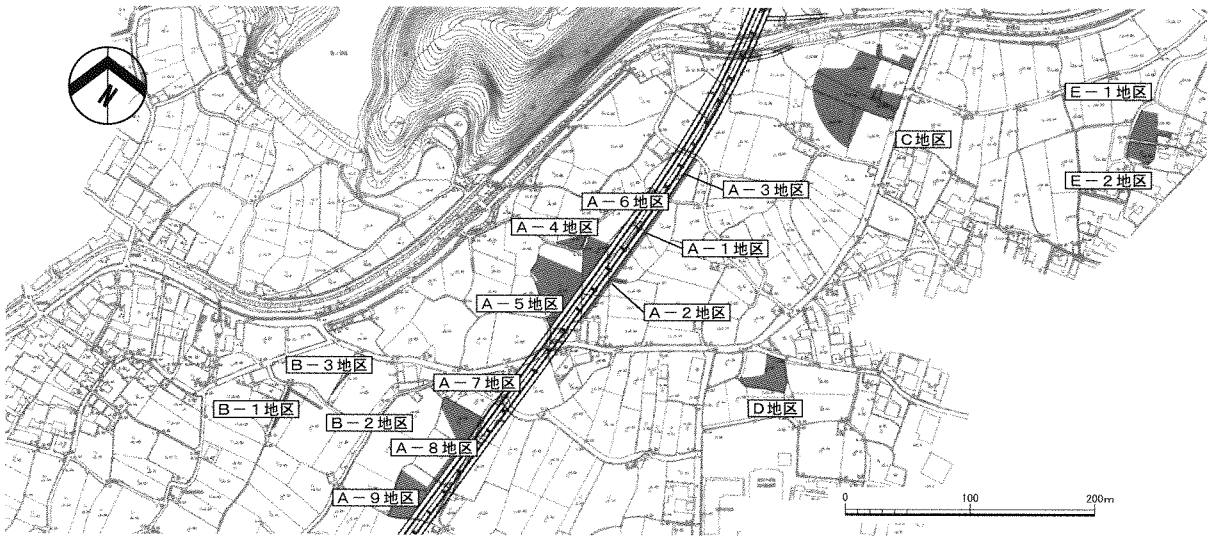
中世の建物群は方位から、①建物１・２・６・７、②建物３・４・５・８の２群に分けることができ

る。建物１と建物２、建物６と建物７が重複することから、①群内で前後関係が成立する。建物１・７には焼土を含む柱穴埋土が多く確認できたが、建物２・６には確認できなかったことから、先に建物２・６が存在し、火事による建物焼失後、建物１・７が建てられたのではないかと思われる。②群については建物３と建物８、建物４と建物５は、柱筋が通るように建てられていることからそれぞれ同時期と考えられる。

次に建物柱穴出土遺物から時期の検討を行いたい。東播系須恵器鉢に関して、建物５出土**28**は口縁端部を上方に大きく拡張し、兵庫津遺跡Ｅ１類（『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004）に近い特徴を備えるが、建物１出土**1**は、上方に拡張した口縁端を内側に傾ける特徴から兵庫津遺跡Ｅ２類もしくはＦ類に近く、後者が新しい時期である可能性が高い。また土師器皿に関して、建物３出土**19・20・25**は全て、口縁部に強いナデを施す特徴が久保ノカチ遺跡ａ１類（『久保ノカチ遺跡Ⅱ』南あわじ市教育委員会2014）と共通するのに対して、建物１出土**2・5・10**や建物２出土**12・14**は、全体を薄く、口縁端部を尖り気味に仕上げる特徴が久保ノカチ遺跡ａ２類と共通する。したがって②群は14世紀後半頃、①群は15世紀前半頃と推定される。ただし出土遺物からそれぞれの群内の時期差までは判別できない。

建物柱穴以外に調査地西側を中心に溝や土坑等が検出された。溝１やコの字型の溝３は良好な出土遺物は無いが、②群とほぼ平行することから、②群と何らかの関わりをもつ遺構と思われる。土坑42からは、①群と同時期と思われる土師器皿**32**が出土している。これ以外の土坑からは良好な遺物が出土していない。

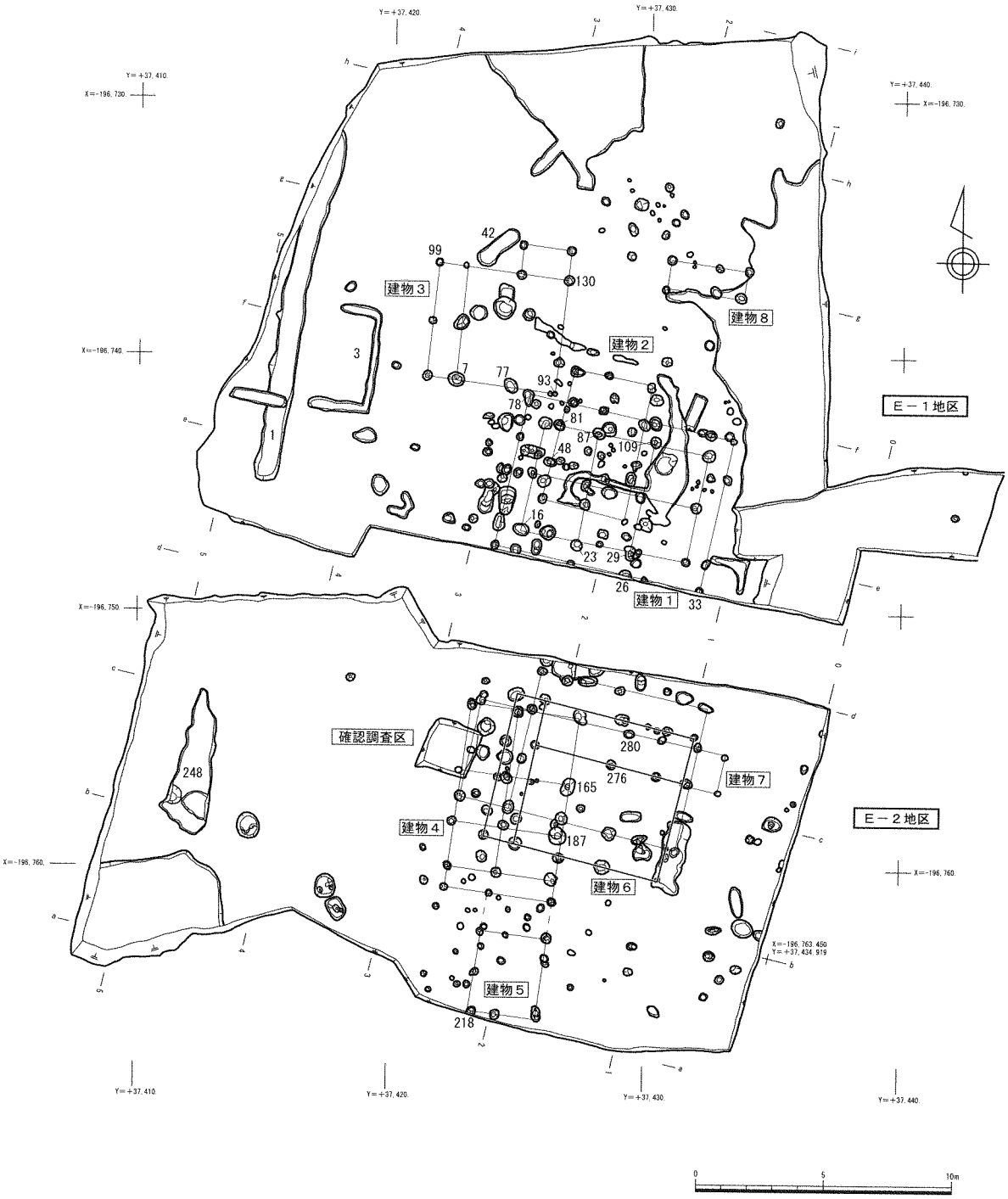
塩屋川沿いの低平な沖積地に位置するＡ～Ｃ地区では、12～13世紀の建物20棟に対して、14世紀以降の建物はわずか２棟であった。当調査区は扇状地あるいは山麓に位置する微高地で、14世紀後半～15世紀前半の建物が８棟検出され、集落が移動した可能性が高い。中世の阿万荘は貞応二（1223）年の『淡路国大田文』に、石清水八幡宮領として「本庄百町」と「沼嶋三町」の合わせて百三町の田が記載され、淡路国で賀集荘に次ぐ広大な耕地面積を誇っていた。その百町の田は塩屋川沿いの沖積地を中心に展開し、その結果として荘民の集落が塩屋川沿いに展開したものと推定される。当調査地の南約150mには亀



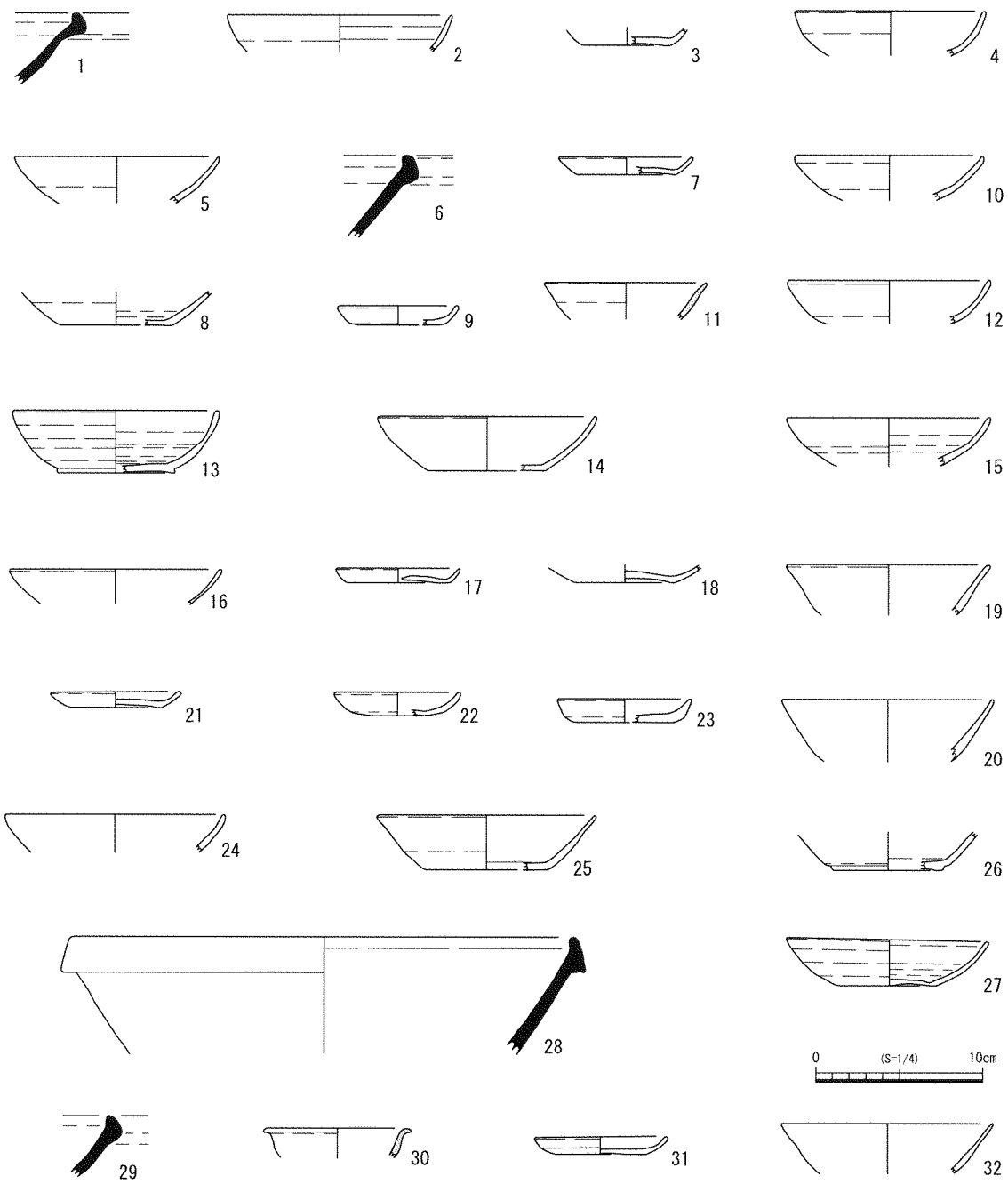
調査区設定図

岡八幡神社があり、周辺が「本庄」と呼ばれる場所であることは注目される。史実かどうかは不明であるが、亀岡八幡神社は貞永元（1232）年に現在の場所に移ってきたと伝えられている。亀岡八幡神社の創建後、塩屋川沿いから当調査区周辺に集落が移動し、次第に阿万地区の中心としての現集落の原型が形づくられていったと推定される。

（山崎）



平面図



建物 1
1　柱穴16　2　柱穴23　3　柱穴26　4　柱穴29　5　柱穴33　6～8　柱穴78
9　柱穴87　10　柱穴109

建物２
11・12　柱穴48　13～17　柱穴81

建物３
18～20　柱穴7　21　柱穴77　22　柱穴93
23　柱穴130　24・25　柱穴99

建物４
26　柱穴165　27　柱穴187

建物５
28　柱穴218

建物６
29　柱穴276

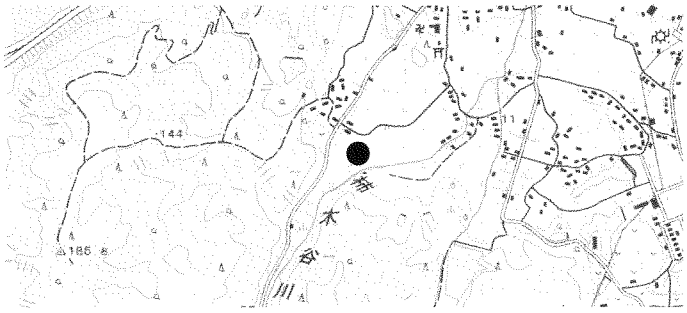
建物７
30　柱穴280

土坑42
31・32

出土遺物

4　里丸山古墳群（さとまるやま）　－３次調査－

所 在 地　湊里字丸山
事 業 名　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　坂口弘貢
種　　別　本発掘調査
調査期間　平成23年6月28日～11月17日
調査面積　375.4㎡



調査の位置

1　調査内容

圃場面と農道部分の調査を行った。

調査地の現状は、西から東に階段状に傾斜する水田からなり、前面には柿木谷川が東方向に流れている。調査区の標高が23.88m、東側圃場の標高が20.05mで高低差が約3.8mとなる東方向に開けた段丘面の先端部に位置する。

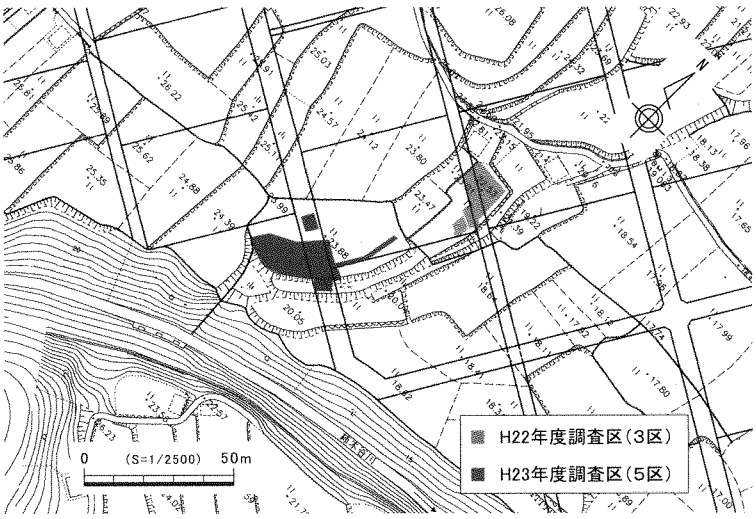
調査は、平成22年度に見つかった１・２号墳（３区）周辺で緊急に行った確認調査（２次調査）を受けて、地下の遺跡が破壊される部分を里原田遺跡４次調査５区として進めていった。また調査途中に事業者及び地元と協議を行い、３号墳・４号墳・５号墳・６号墳（石室A）・11号墳・12号墳・13号墳以外の古墳は、埋め戻しの上現状保存されることになった。

調査区の土層堆積は、調査区西側では耕作土下約４㎝にベースとなる黄色系の土壌が堆積しており、東方向に向かって傾斜する。確認した遺構には、古墳13基、土坑、溝などがあり、古墳やそれに伴う周溝以外の遺構は、近世後半頃の遺構が中心と考えられ、近世以前は基本的に居住域として利用されていなかったと思われる。

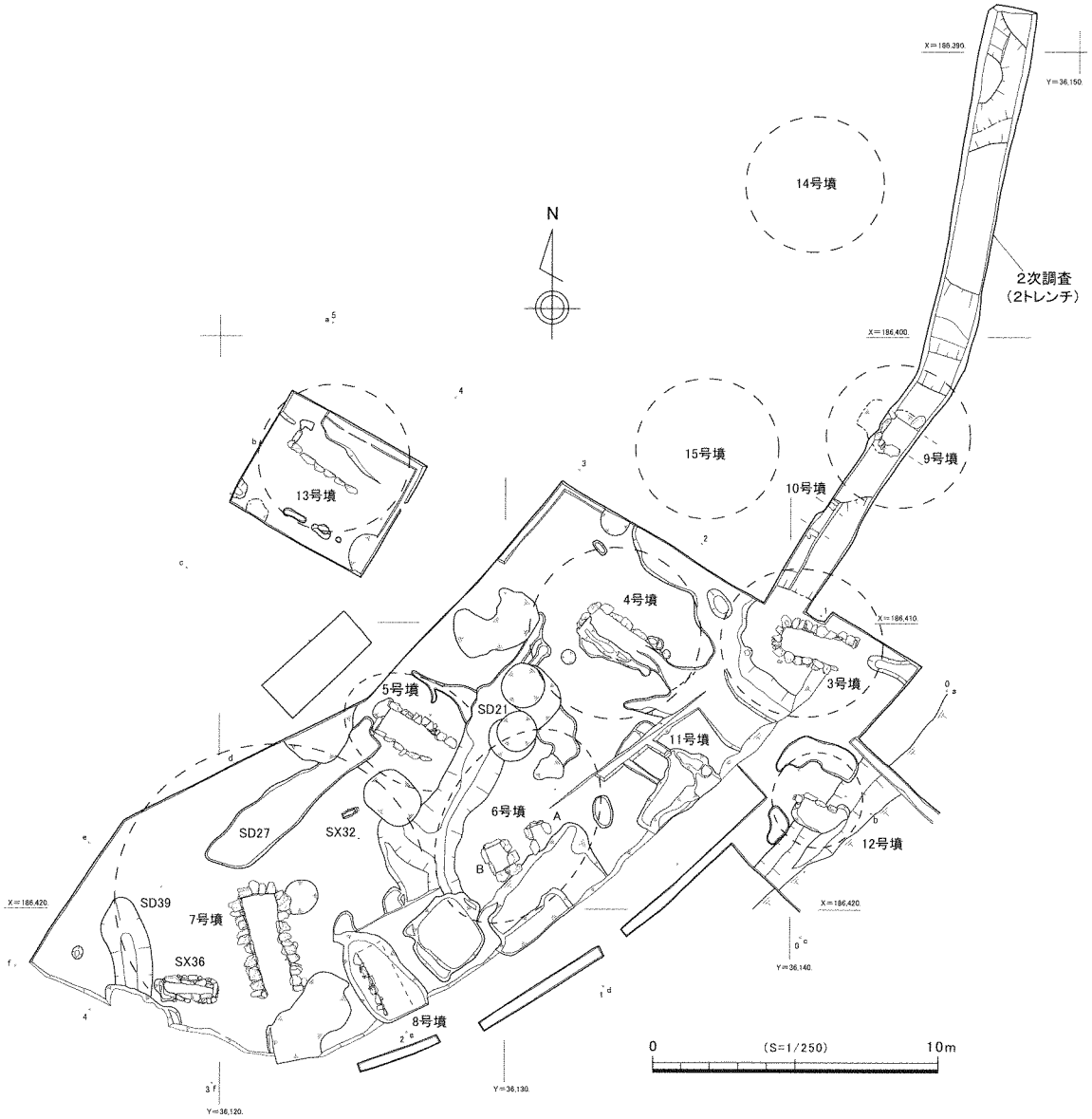
以下代表的な遺構の概要を記す。なお確認した古墳の名称は、１・２号墳に引き続き、３号墳から順に番号を付していった。

３号墳　調査区北東隅に位置する。直径約5.0～5.5mの円墳と考えられる。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で、規模は長さ2.68m、奥壁幅89㎝、残存高74㎝を測る。奥壁は１石で構成される。遺物は須恵器・土師器が出土しており、特に須恵器の出土量が多い。出土遺物から７世紀中頃に造られて、７世紀後半頃に追葬があったと思われる。

４号墳　調査区北寄りに位置する。直径約6.5mの円墳と思われる。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で右側壁が抜き取られている。規模は左側壁部分で残存長1.88mとなるが、復元長は3.0mあまりになる可能性が高い。復元幅約90㎝、残存高25㎝を測る。遺物は少ないが須恵器が出土しており、７世



調査区位置図



調査区平面図

紀中頃に造られたと考えられる。

５号墳　調査区中央西寄りに位置する。直径3.6～4.5mの円墳と考えられる。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で北側の奥壁が抜き取られている。石室北西部とＳＤ27が一部重複する。ＳＤ27からの出土遺物は土師器の小片のみで明確な時期は不明であるが、石室の掘方を壊す形でＳＤ27 が確認できており、古墳よりは新しい時期の遺構と思われる。規模は長さ2.67m、奥壁幅92㎝、残存高24㎝を測る。右側壁の中央部がやや胴張りになる特徴が認められる。遺物は須恵器坏身が１点出土しており、７世紀中頃に造られたと考えられる。

６号墳　調査区中央東寄りに位置する。長辺約7.0m、短辺約5.0mの楕円形の古墳と考えられる。埋葬施設は小規模な竪穴式石室が２基並列して配置される。ここでは北東側の石室をＡ、南西側をＢとする。石室Ａは南東部分が破壊されている。残存長81㎝、北西壁幅45㎝、残存高21㎝を測る。石室Ｂは長さ92㎝、北西壁幅60㎝、残存高34㎝を測る。遺物は非常に少なく、石室Ａから刀子と思われる鉄片が僅

かに出土している。周溝と考えられるＳＤ21が西側にある５号墳を切る形で位置することから、５号墳よりも新しいと思われる。

７号墳　調査区南西部に位置する。東西幅約11mの円墳と考えられる。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で長さ3.50m、奥壁幅1.24m、残存高42～53㎝を測る。墳丘規模・埋葬施設の幅が共に古墳群中最大の規模である。床面には直径約30㎝以下の礫が敷かれている。奥壁側にはやや大きめの礫、入口側には小さめの礫が多い傾向が認められ、玄室部と羨道部の境界にはやや大きめの礫が１列並べられる。遺物は須恵器・土師器・鉄器・耳環・ガラス玉などが出土している。出土遺物から６世紀末頃に造られ、７世紀中頃と後半頃に追葬があったと考えられる。

また墳丘裾部に小型の竪穴式石室が２基（ＳＸ32・36）確認できた。いずれの石室も７号墳石室に直行する形で配置される。ＳＸ36は７号墳石室の約３ｍ西に位置する。西側と南西隅の石材が抜き取られている。規模は長さ1.67m、幅24～39㎝、残存高25㎝を測る。東側が狭く西側が広く復元できる。ＳＸ32は、７号墳石室の約４ｍ北東に位置する。規模は長さ47㎝、幅９～15㎝で北東部が狭くなる。高さは内法で11㎝を測り、検出時には蓋石が残っていた。いずれの石室からも遺物は出土していないが、７号墳築造後の近い時期に造られたと思われる。

８号墳　７号墳の約４ｍ南東に位置する。近世後半頃に破壊されており、埋葬施設は横穴式石室と思われ、右側壁のみ残存している。規模は残存長2.45m、復元幅約90㎝、残存高約30㎝を測る。遺物は陶磁器・瓦など近世以外のものは出土していないが、７号墳より後に造られたと思われる。

９号墳　確認調査区（２トレンチ）に位置する。奥壁と側壁の一部が確認できており、埋葬施設は横穴式石室と思われる。規模は残存長92㎝、奥壁幅90㎝を測る。出土遺物はない。

10号墳　確認調査区（２トレンチ）に位置する。石室を構成すると思われる石材が集中しており、幅92㎝と想定される。出土遺物はない。

11号墳　調査区中央北寄りに位置する。奥壁・側壁の抜き取り穴と思われる遺構がコの字状に残る。規模は、残存長1.4m、復元幅約90㎝を測る。出土遺物はない。

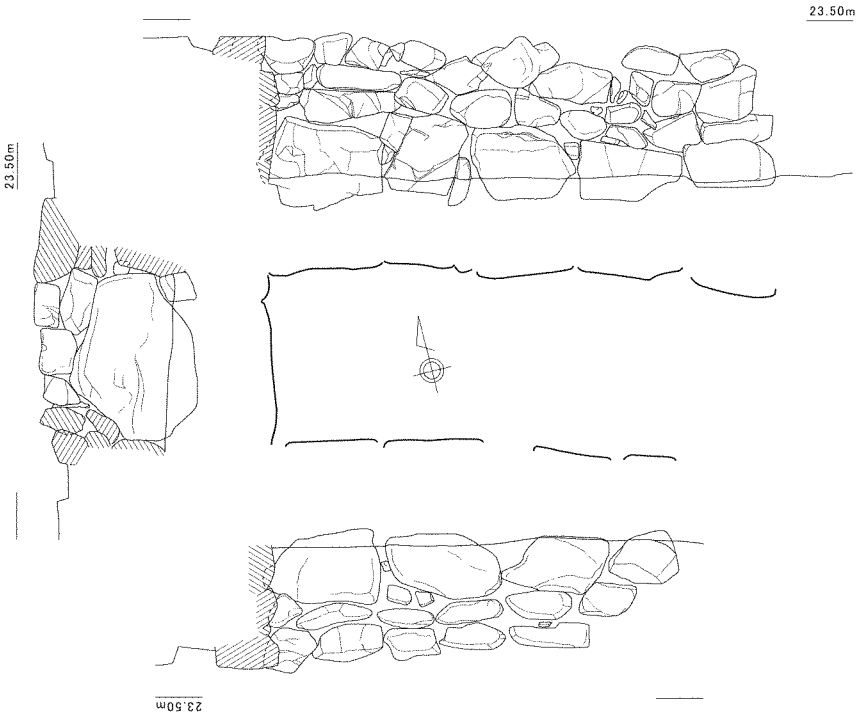
12号墳　調査区北東部に位置する直径3.0～3.5mの円墳と思われる。右側壁が抜き取られており、奥壁と左側壁が残存する。石材を立てて使用していることと石室幅から埋葬施設は竪穴式石室の可能性がある。規模は残存長1.23m、復元幅約40㎝、残存高48㎝を測る。遺物は石室内から土師器甕口縁部と周溝から須恵器脚部が出土しており、７世紀中～後半頃に造られたと思われる。

13号墳　調査区北西部に位置する直径約５ｍの古墳である。右側壁のみ残存し、埋葬施設は無袖式の横穴式石室が想定される。規模は長さ約2.8m、復元幅約90㎝、残存高22㎝を測る。遺物は須恵器高坏が出土しており、７世紀中頃に造られたと思われる。

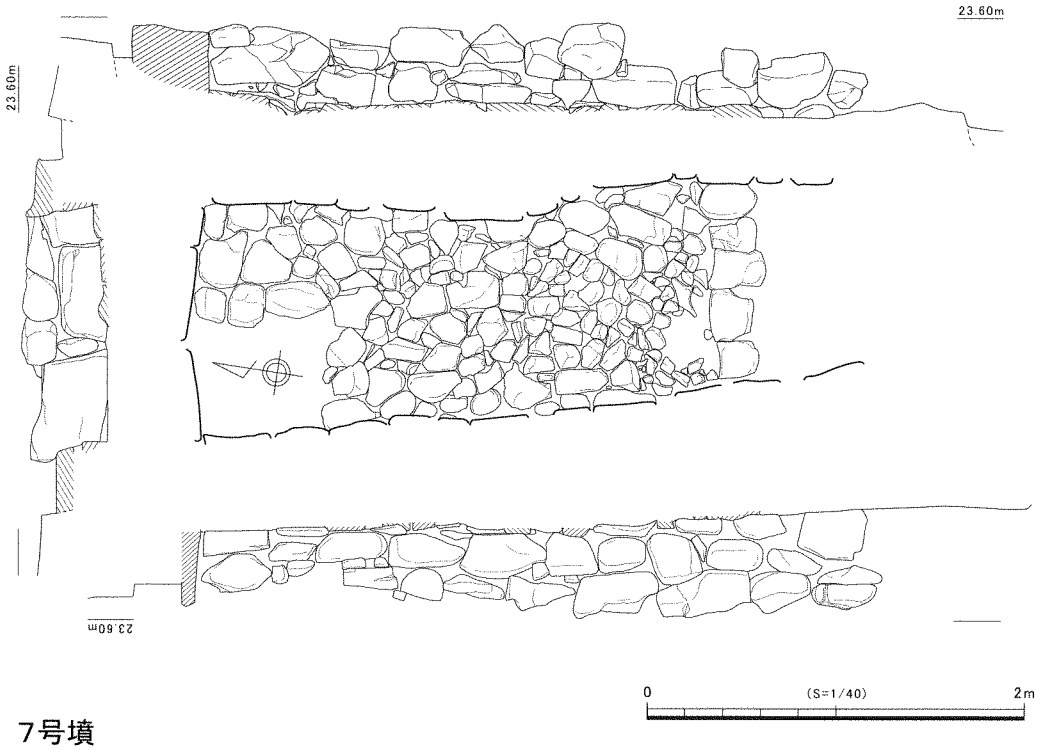
14・15号墳　本発掘調査区北側に石材が露出する部分が２ヶ所あり、それぞれ14・15号墳と呼ぶことにした。規模や時期は不明。

２　まとめ

本調査により、13基の古墳を確認することができた。平成22年度の成果を合わせると合計15基以上となり、古墳群を形成していることが明らかとなった。埋葬施設は無袖式の横穴式石室を中心に時期が新しくなるにつれ規模が小さくなると共に小型の竪穴系の石室を採用する特徴が認められる。古墳の埋葬時期は、追葬も含めると６世紀末～７世紀後半頃におよぶと思われ、以下の変遷が想定される。



3号墳



7号墳

3・7号墳石室平面・立面図

6世紀末頃：7号墳初葬・SX32・SX36

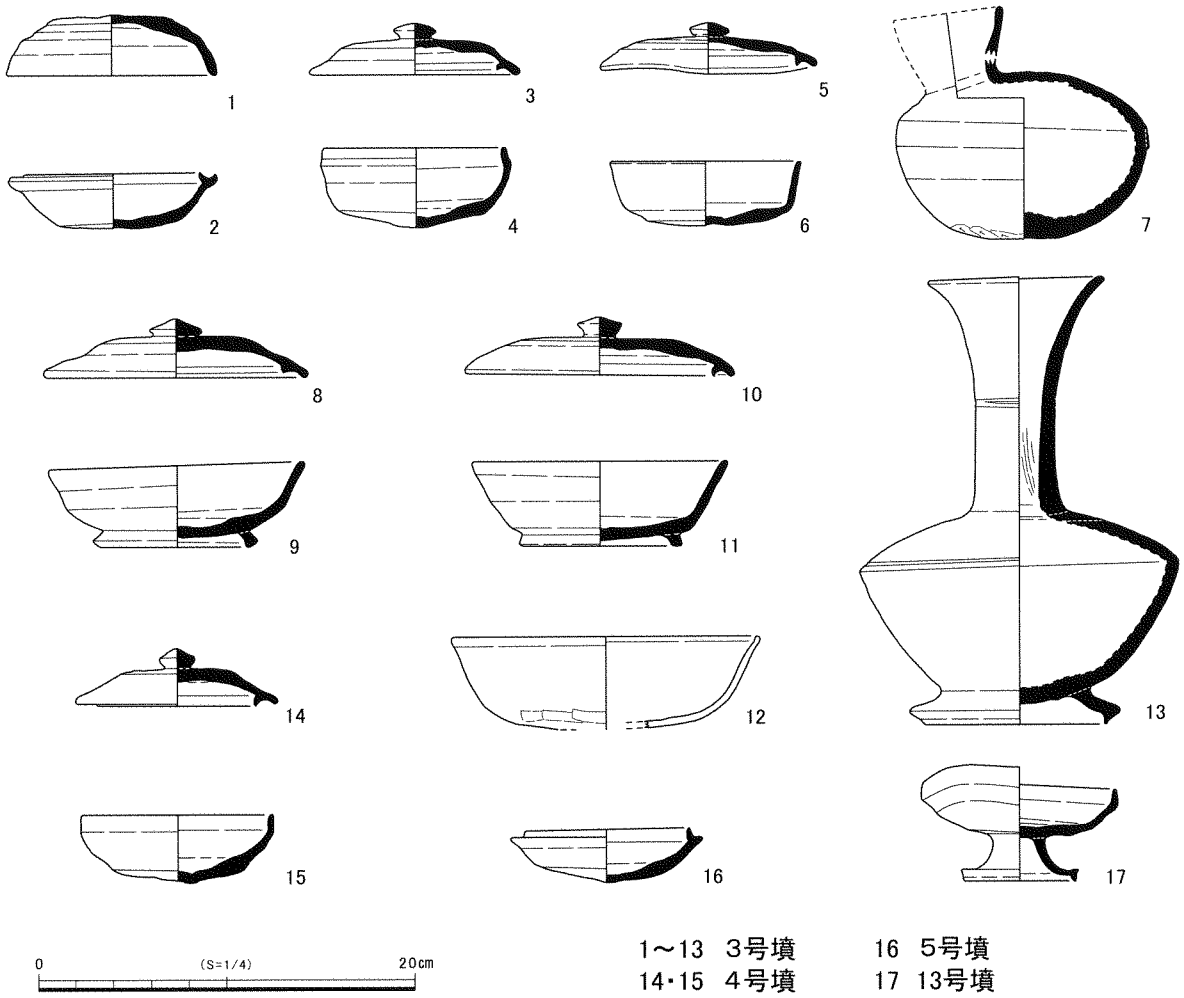
7世紀中頃：4号墳・5号墳・3号墳・13号墳・7号墳追葬Ⅰ

7世紀中～後半頃：12号墳

7世紀後半頃：3号墳追葬・7号墳追葬Ⅱ・6号墳

不明：8号墳・9号墳・10号墳・11号墳（これら4基の古墳は石室幅が約90㎝の横穴式石室墳に復元されると思われることから7世紀前半～中頃の可能性が高い。）

また、未調査部分も含めると20基程度の古墳群になると思われる。現在までのところ三原平野の中で



1～13　3号墳　　16　5号墳
14・15　4号墳　　17　13号墳

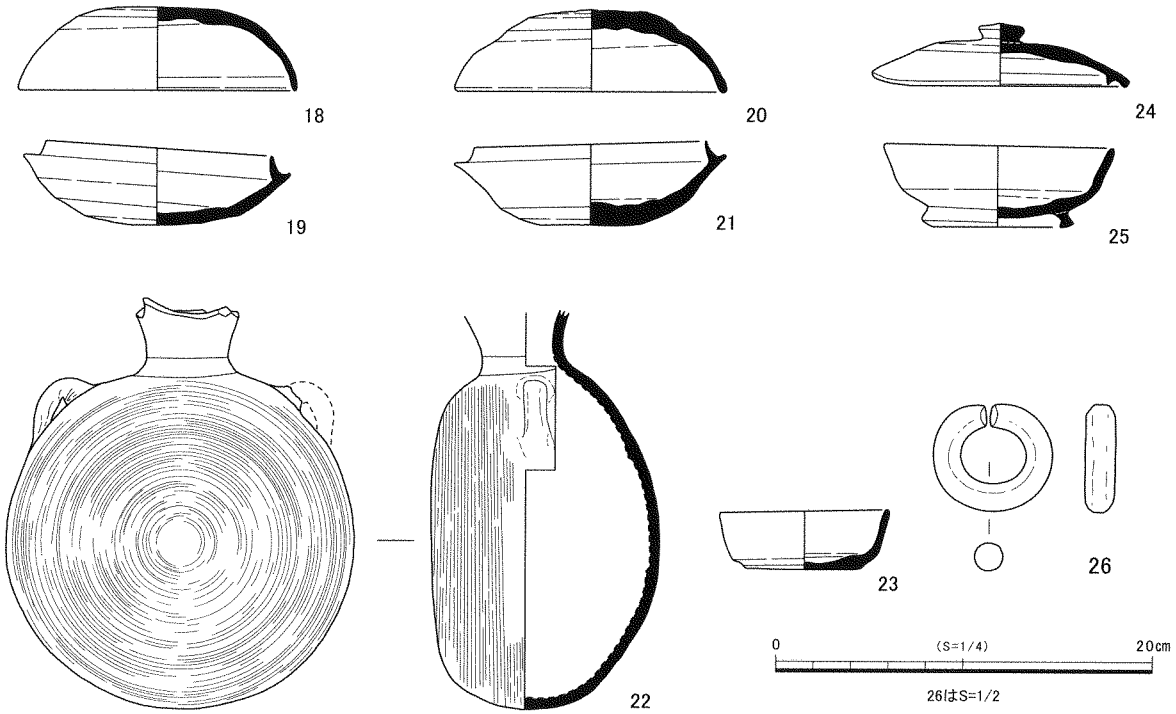
3・4・5・13号墳出土遺物

3号墳（東より）

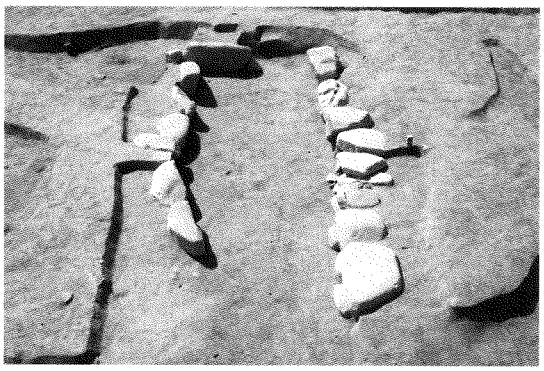
3号墳遺物出土状況（東より）

は最大規模となり、交通の要衝である三原平野入口周辺部に位置する湊地域の首長の古墳群と考えられよう。

(坂口)

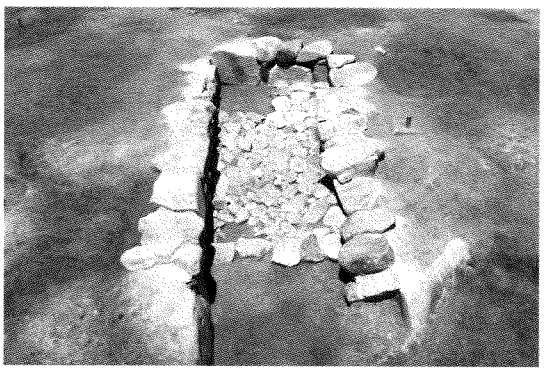


７号墳出土遺物

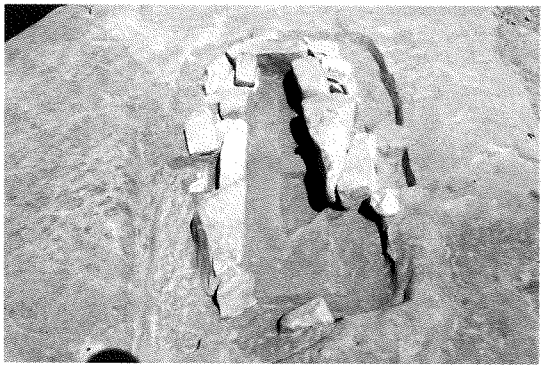


５号墳（南東より）

６号墳（南東より）



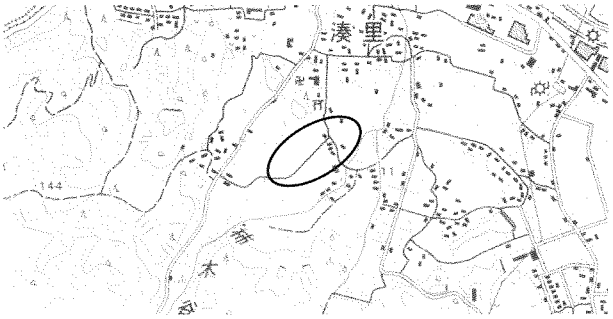
７号墳（南より）



ＳＸ36（西より）

5　里原田遺跡　－４次調査－

所 在 地　　湊里字原田外
事 業 名　　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　　定松佳重・的崎薫・山崎裕司
種　　別　　本発掘調査
調査期間　　平成23年７月５日～11月27日
調査面積　　3,034.4㎡



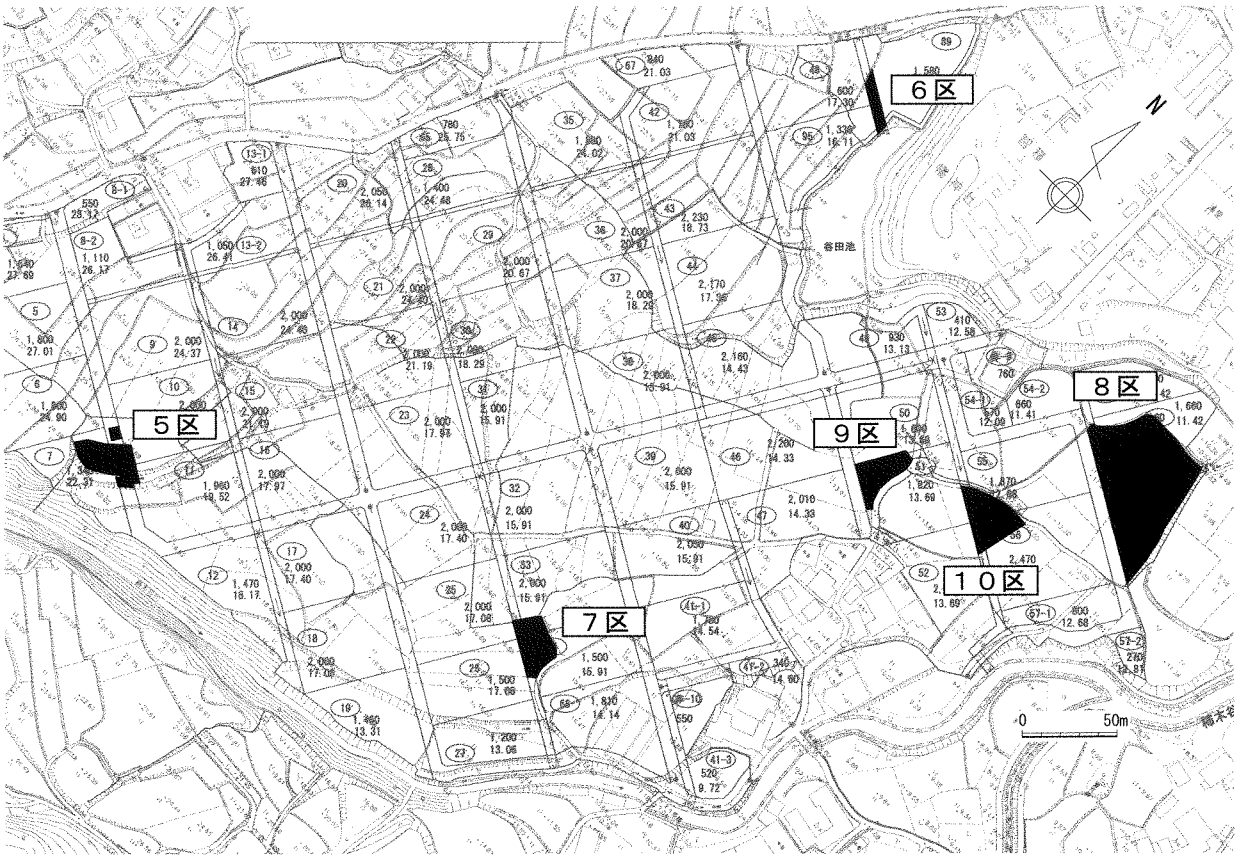
調査の位置

1　調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、大日川と三原川が合流する左岸に位置する。周辺には山の口古墳や式内社である湊口神社、叶堂城跡（室町時代）、後山遺跡（弥生・平安・室町時代）、湊城跡（室町時代）等遺跡が多く立地する。

平成21年度に実施した遺跡範囲確認調査の成果を基に、事業実施によって遺跡に影響の及ぶ部分の記録保存を行うこととなった。調査区番号は、平成22年度調査の調査区を引き継いで設定している。

以下、主な調査区ごとに述べるが、５区は里丸山古墳群３次調査（ｐ13～18）として別に記述する。



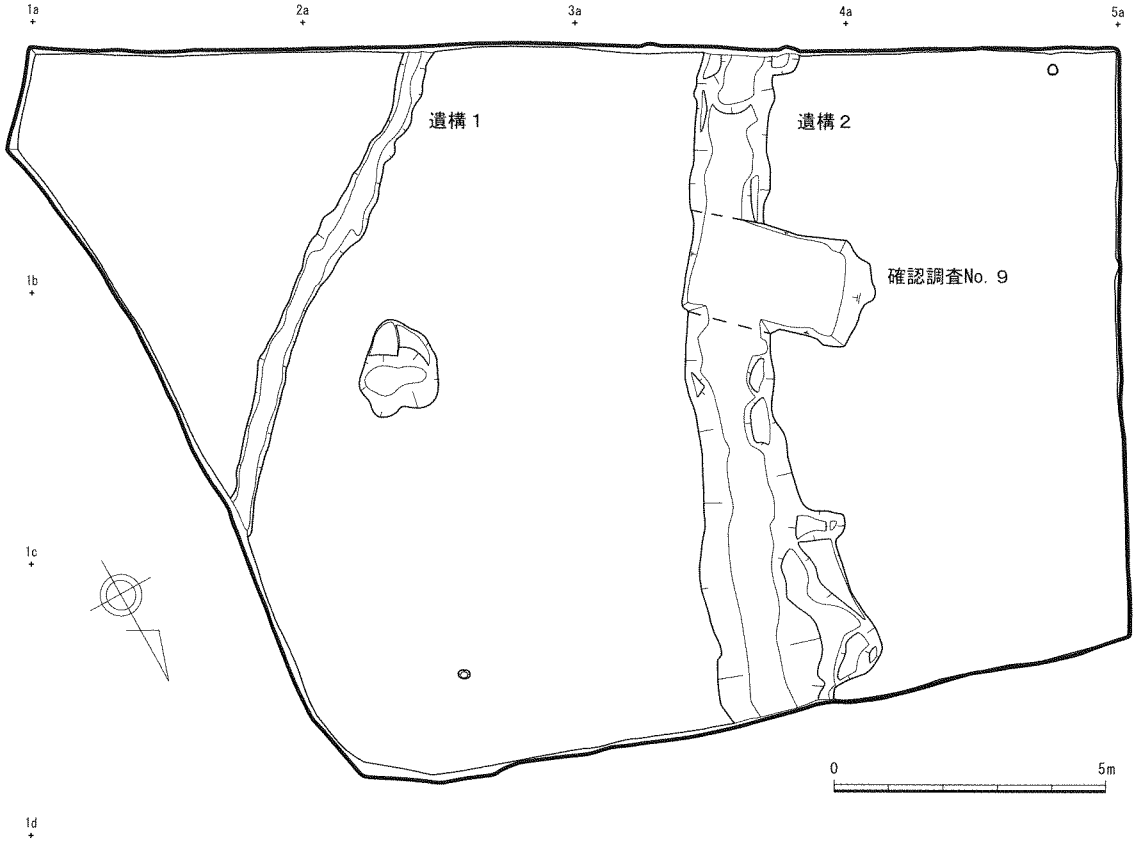
調査区設定図

［７区］

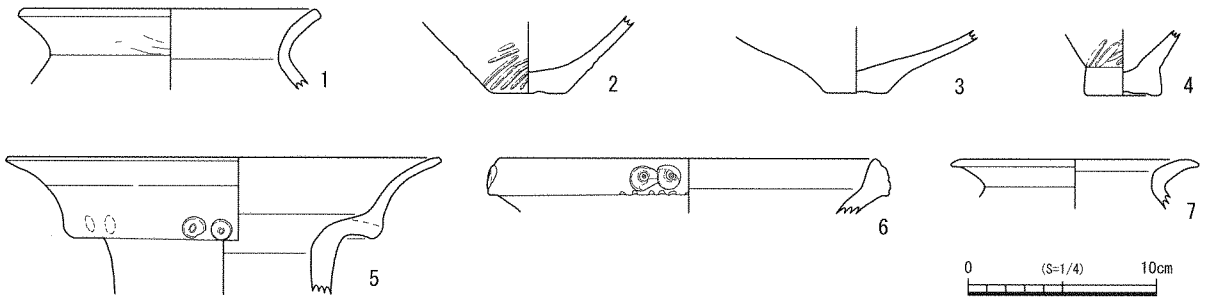
調査区中央部で南西から北東方向の溝２条を確認した。

遺構１　幅0.9m、深さ0.5mを測る。弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土した。

遺構２　幅1.5～3.0m、深さ0.5mを測る。埋没後に掘り直しがされている。遺構１と同様に弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土した。



７区　平面図



７区　出土遺物（1.遺構１　2～7.遺構２）

［８区］

掘立柱建物・溝・土坑・柵列など、遺構の密集した調査区である。

建物１　桁行４間（１間の柱間1.9m）・梁行３間（1.7m）を測る。総柱建物である。東梁行に１間、北に１間張り出す。瓦器出土。

建物２　桁行４間（1.8～2.5m）・梁行３間（1.7m）を測る。総柱建物である。瓦器出土。

建物13
建物12
建物1
建物2
建物3
建物4
建物5
建物6 a
建物6 b
建物7
建物8
建物9
建物10
建物11
建物14
建物15
建物16
建物17
建物18
建物19
柵1
柵2
柵3
柵4
柵5
柵6
柵7
堀1
堀2
15a
14a
13a
12a
11a
10a
9a
8a
7a
6a
5a
4a
3a
2a
1a
1c
1d
1e
1f
1g
1h
1i
1j
1k
518
905
613
603
538
771
655
785
669
640
790
316
153
167
41
11
19
14
175
986
524
1230
1204
1100
1042
1314
1060
0
5m

8区　平面図

建物３　桁行２間（2.0m）以上・梁行１間（2.3m）を測る。黒色土器Ａ類出土。

建物４　桁行３間（1.8m）以上・梁行２間（2.2m）を測る。瓦器出土。須恵器水瓶片**5**は遺構11出土と同一個体片。

建物５・柵２　桁行３間（2.3・3.6m）梁行２間（1.9m）を測る。内部に床束を持つ。遺構167埋没後に建てられる。柵２はＬ字形に確認した。0.8～1.7m間隔で北に面したところは３m間隔である。瓦器出土。

建物６ａ・６ｂ　桁行３間（2.3m）・梁行２間（2.0m）を測る。建物６ｂは建物６ａから南側１間が縮小され、柱穴を大型化した建替えが行われている。建物６ｂの遺構175より波状文の中心に人物がヘラ描きされた軒平瓦**6**が出土した。南側軒にのみ瓦を葺いた可能性が考えられる。他に黒色土器Ａ類出土。

建物７・塀１　桁行２間（2.1～2.5m）・梁行１間（2.5m）を測る。建物の南側に1.0～1.4m間隔で大型柱穴が並ぶ。板塀の可能性が考えられる。塀１の遺構14からは蓮弁文がかなり簡略化され突線状化したハート型で表現された軒丸瓦**7**が出土した。他に黒色土器Ａ類出土。

建物８　桁行３間（2.3m）以上・梁行２間（2.8m）を測る。総柱建物である。

建物９　桁行２間（1.6m）・梁行３間（1.3m）を測るが、東の１間は柱穴が浅いため軒支柱と思われる。

建物10・柵３　桁行３間（1.9m）以上・梁行２間（2.1m）を測る。総柱建物である。建物西側に柵３が並ぶ。柱穴316より楓文様のスタンプ文が施された軒平瓦**9**や蓮弁文をヘラ描きした軒丸瓦**10**など、瓦が多く出土する。柱穴はいずれも深く、瓦葺だった可能性が考えられる。

建物11・柵５　桁行５間（2.3m）・梁行２間（2.3m）を測る。東梁行のやや南に桁に平行して柵５が付随する。黒色土器Ａ類出土。

建物12・柵４・遺構640　桁行３間（2.0m）・梁行２間（1.8m）を測る総柱建物である。四面に庇が付く格の高い建物である。雨落ち溝（遺構640）が残存する。北側に平行して柵４が付随する。瓦器出土。

建物13　桁行４間・梁行３間以上を測る。桁・梁行それぞれ両側１間ずつが2.0m、中央が1.7mと意図的に変えられており、他の建物と異なり規格性を持つ。黒色土器Ａ類出土。

建物14　桁行３間（1.6～2.0m）・梁行４間（1.0～1.7m）を測る。南側２間は歪んでおり、後に建てられたと思われる。遺構640に切られている。瓦器出土。

建物15　桁行２間（1.8～2.5m）・梁行１間（2.7m）を測る。

建物16・柵６・７　桁行３間（2.2m）・梁行２間（2.5m）を測る。北側の桁行は柱穴が大きくなり柱の通りは南側と同じであるが１間が4.2mとなって欠けており、２間分の空間は出入口があったと思われる。大型柱穴と出入口の存在から、北側からの視線を意識した造りになっていたと思われる。柵６・７は遺構518・1060埋没後新たに建てられた区画柵と思われる。

建物17　桁行３間（2.0～2.7m）・梁行２間（2.3m）を測る。総柱建物である。黒色土器Ａ類出土。

建物18　桁行２間（2.0m）・梁行２間（1.8m）を測る。中央に束柱を持つ。瓦器出土。

建物19　桁行３間（2.2m）以上・梁行２間（2.1m）を測る。建物10に切られる。瓦の出土が多い。

塀２　３間のみ確認し、間隔は1.7mを測る。柱穴は大型であるが建物は構成しないため、塀とした。どの建物に付随するかは不明である。

遺構11・1230　ややくぼんだところを整地している。遺物は８世紀前半の須恵器水瓶や土師質土器の三足部、８角に面取りした土師器高坏の脚部や黒色土器Ａ類が出土。

遺構19　2.2×1.15mの長方形を呈し、深さ0.25mを測る。底は平坦であるが、墓の痕跡は確認できなかった。瓦器・青磁碗・須恵器こね鉢出土。

遺構167　3.9×4.6m、深さ0.3mを測る。水を溜めた痕跡はなく、性格不明である。ヘラ描きの波状文軒平瓦**46・47**や淡路国分尼寺出土瓦と同文の唐草文軒丸瓦**48**や道具瓦**45**などが出土する。

遺構518・1060　西に隣接する圃場とは1.4～2.3mの高低差があり、区画溝と思われる。断面観察より深さが0.5m以上確認できる。遺構1060は調査区北端部まで続き、直角に西に曲がる。両遺構から瓦・製塩土器が出土するが、遺構1060は製塩土器（丸底Ⅳ式）が多く出土。

遺構524　座棺である。頭骨の一部と古銭25枚、青銅製の鞘を持つ刀子、土師器皿が出土した。最新銭（宣徳通寶・初鋳1433年）より15世紀中頃以降と思われる。

1	開元通寶	６２１年	14	永楽通寶	１４０８年
2	皇宋通寶	１０３８年	15	紹聖元寶	１０９４年
3	政和通寶	１１１１年	16	永楽通寶	１４０８年
4	開元通寶	６２１年	17	淳化元寶	９９０年
5	元祐通寶	１０８６年	18	嘉泰通寶	１２０１年
6	開元通寶	６２１年	19	祥符元寶	１００８年
7	永楽通寶	１４０８年	20	永楽通寶	１４０８年
8	永楽通寶	１４０８年	21	永楽通寶	１４０８年
9	永楽通寶	１４０８年	22	永楽通寶	１４０８年
10	熙寧元寶	１０６８年	23	熙寧元寶	１０６８年
11	宣徳通寶	１４３３年	24	嘉祐元寶	１０５６年
12	元祐通寶	１０８６年	25	開元通寶	６２１年
13	嘉祐元寶	１０５６年			

遺構524　出土古銭一覧表

遺構905　７世紀初頭頃の須恵器坏Hが出土した。この地区の中で一番古い遺構で、この時期の遺構は他に見つかっていない。

遺構1042　落ち状の遺構である。土師器の甕が多く出土し、竈片や製塩土器も含まれていた。また、長さ3.2cmの管玉も混入していた。

遺構1100　7.4×6.0m、深さ0.15mを測る。製塩土器片が多量に出土し、一部に被熱が認められることから、ここで火力による塩生産のなんらかの作業を行っていた可能性が考えられる。

遺構1204　方形に囲うような遺構であったため竪穴建物の痕跡かと思われたが、溝が部分的に非常に深くなっていたため性格不明である。瓦器が出土していることから中世の遺構である。

遺構1314　下層より花崗岩製の五輪塔火輪**70**が出土した。淡路島南部は砂岩地帯であるため石造物は砂岩製が多い。よって近世もしくは近代の遺物かと思われたが、共伴する土器は中世であり、鎌倉～室町時代のものと思われる。

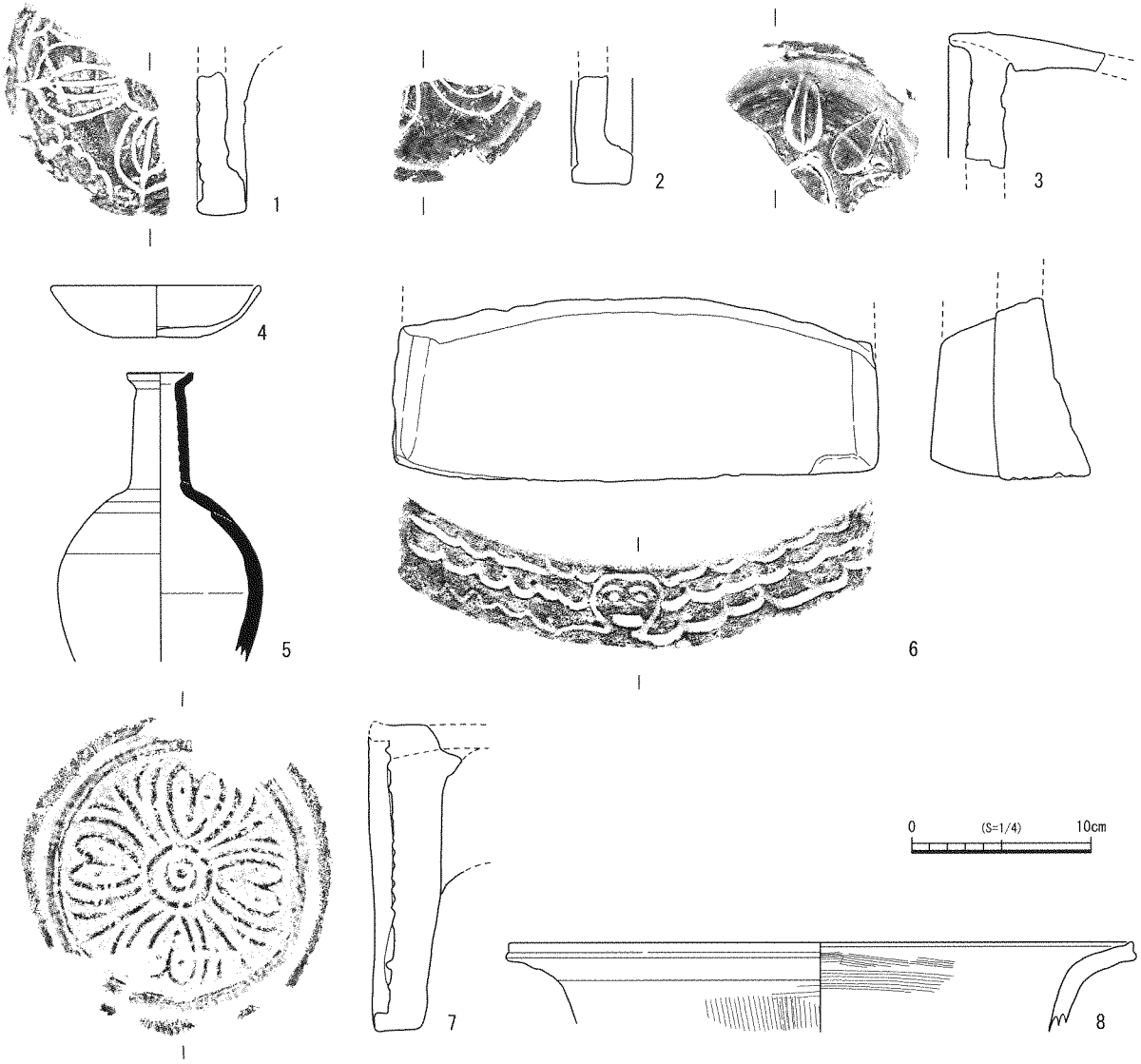
　それぞれの遺構の時期区分を試みると、

遺構905（７世紀初頭）→建物３・６ａ・19 → 建物 10・13・15・17・柵３・遺構 518・1060→遺構 11・1230（10世紀前半）→建物８・11・柵５→建物６ｂ（10世紀後半）→塀２→建物７・16・塀１・柵６・

7→建物14→建物4→建物2・5・18・柵2（13世紀前半）→建物1・12・遺構640・柵4→遺構524（1433年以降）となる。建物9は12世紀後半、柵1は瓦器の時期であるが、他の遺構と切り合いがなく先行関係は不明である。

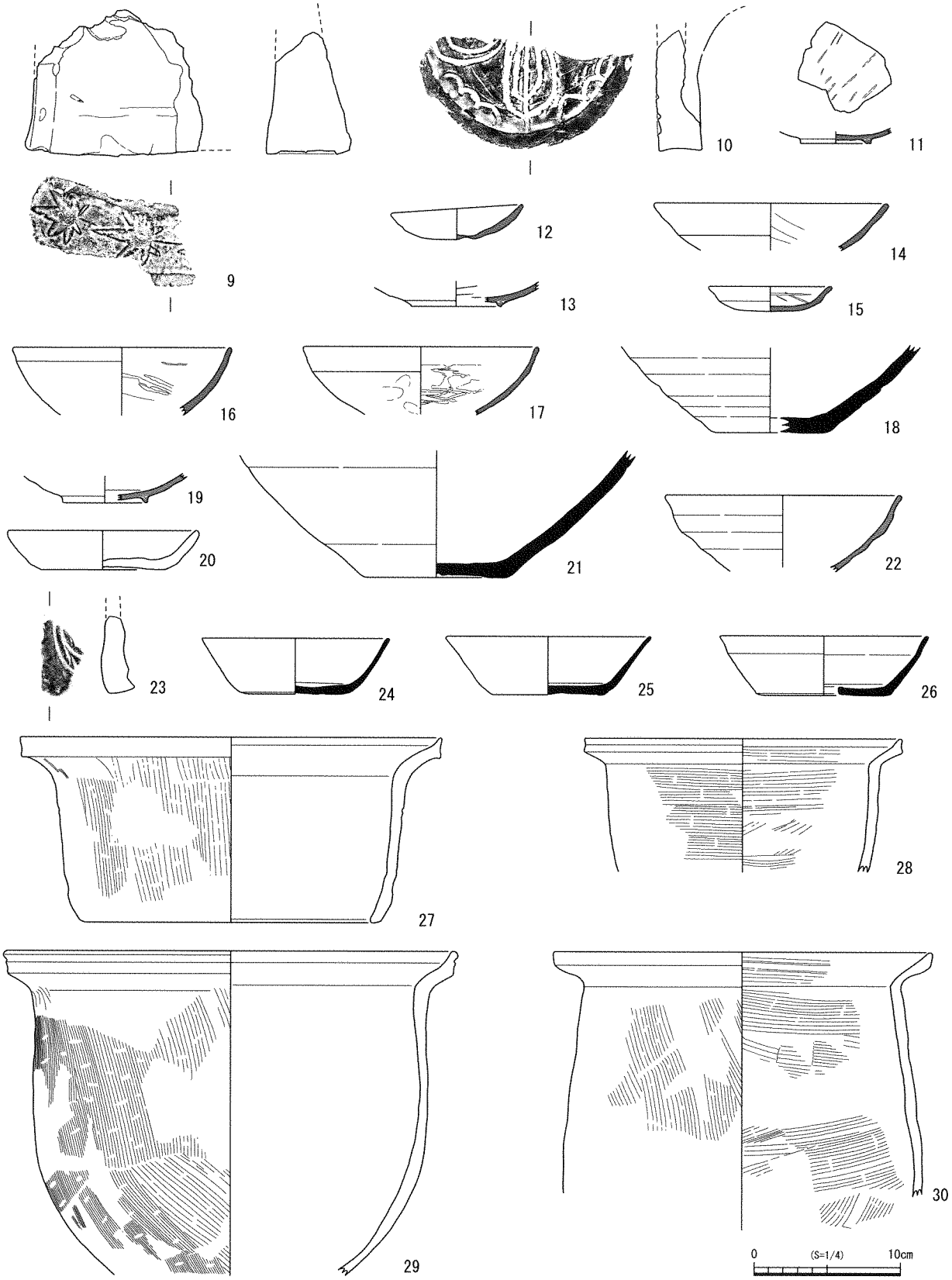
溝518・1060は間に空間があり、ここが東からの出入口とも考えられる。中世においては、庇や張り出しの敷設などから建物1・12・柵4期が最盛期だったと思われる。

この地区の遺物の中では、軒瓦が非常に特異であり、ヘラ描きやスタンプ文、特徴的な文様の笵でつくられたものばかりである。中には泥条盤築技法のように粘土紐を巻き上げて作られた一見須恵器壷の底部と見間違うような軒丸瓦**3**も観られ、須恵器工人の関与がうかがわれる。また、窯壁と思われる硬質の焼土塊が数点出土しており、近辺に窯の存在が推測される。



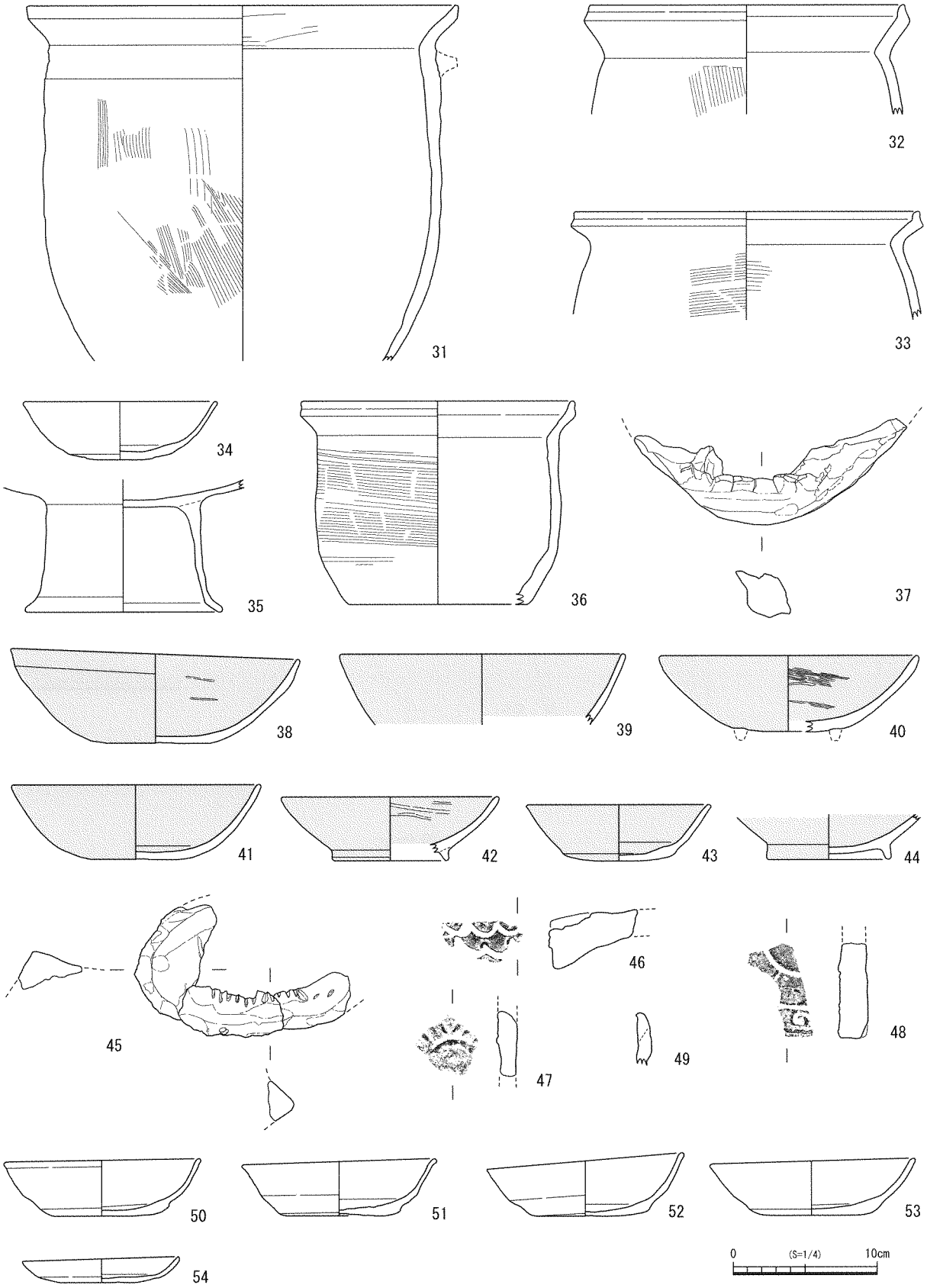
1～3. 包含層　**建物2**　4. 柱穴41　**建物4**　5. 柱穴153　**建物6**　6. 柱穴175　**塀1**　7. 柱穴14　**建物9**　8. 柱穴986

8区　出土遺物1



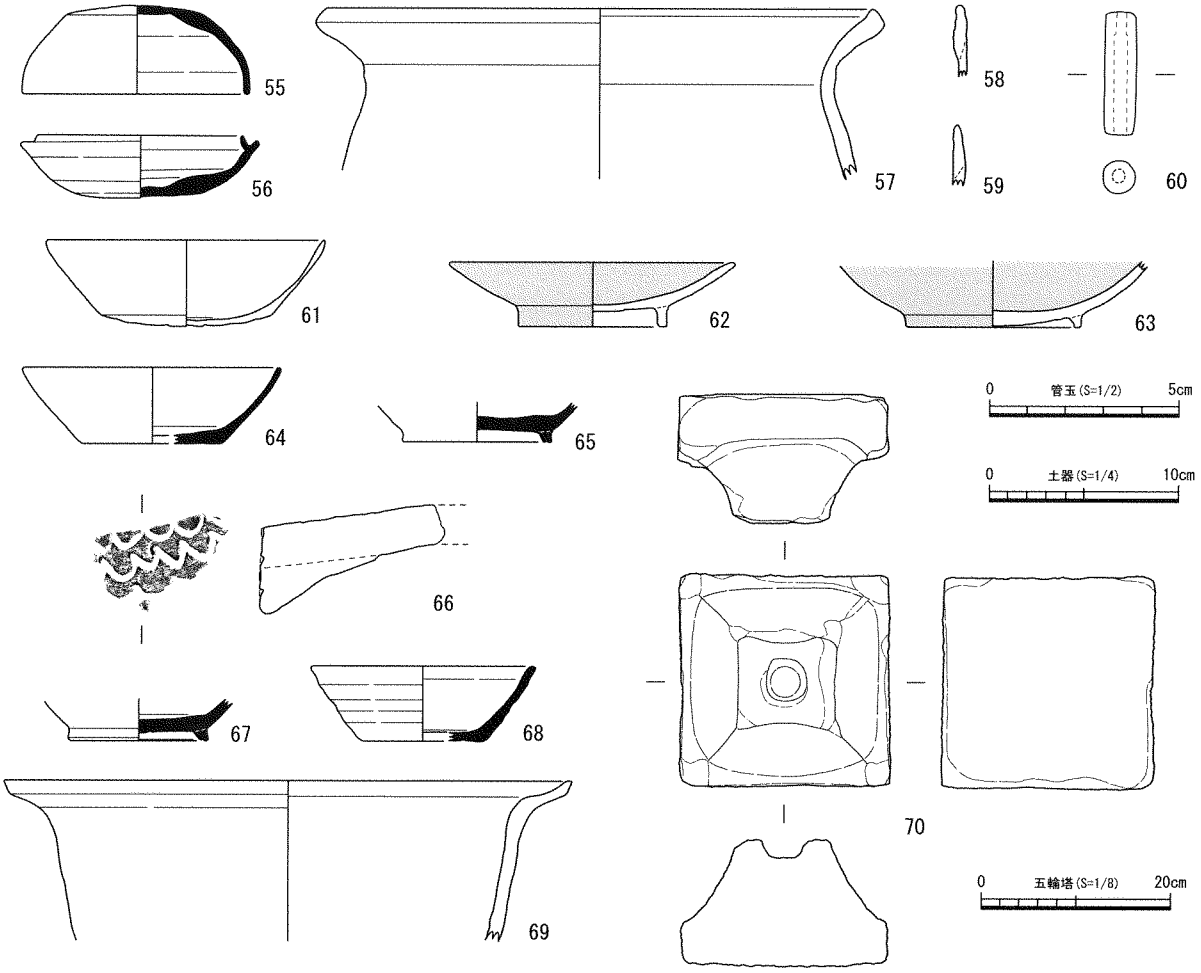
建物10　9～10. 柱穴316　**建物12**　11. 柱穴538　12～14. 遺構640　15. 柱穴603　16. 柱穴613
17～18. 柱穴655　**建物14**　19～20. 柱穴785　21. 柱穴771　22. 柱穴790　23. 柱穴669　24～30. 遺構11

8区　出土遺物2



31～44.遺構11　45～49.遺構167　50～53.遺構518　54.遺構524

８区　出土遺物３



55～56. 遺構905　57～60. 遺構1042　61～64. 遺構1060　65. 遺構1100　66. 遺構1204　67～69. 遺構1230
70. 遺構1314

８区　出土遺物４

［10区］

中世の柱穴・土坑・溝等が検出され、建物１～６、柵列１が復元された。

建物１　３柱穴が隣接することから、３回建て替えが行われたと考えられる。埋土の切り合いが判別できなかったが、後述するように出土遺物から１ａ→１ｂ→１ｃの順に建てられたと推定される。母屋部分は梁行２間×桁行３間の総柱構造で約24.1㎡、四面に庇が付属し、総床面積が42.9㎡を測り、10区では最大である。方位はN51°Ｗを示す。

建物２　梁行２間×桁行２間で、北側に１×１間が付属する。総床面積は約20.5㎡の総柱建物である。方位はN32°Ｅを示す。柵列１が付属する。

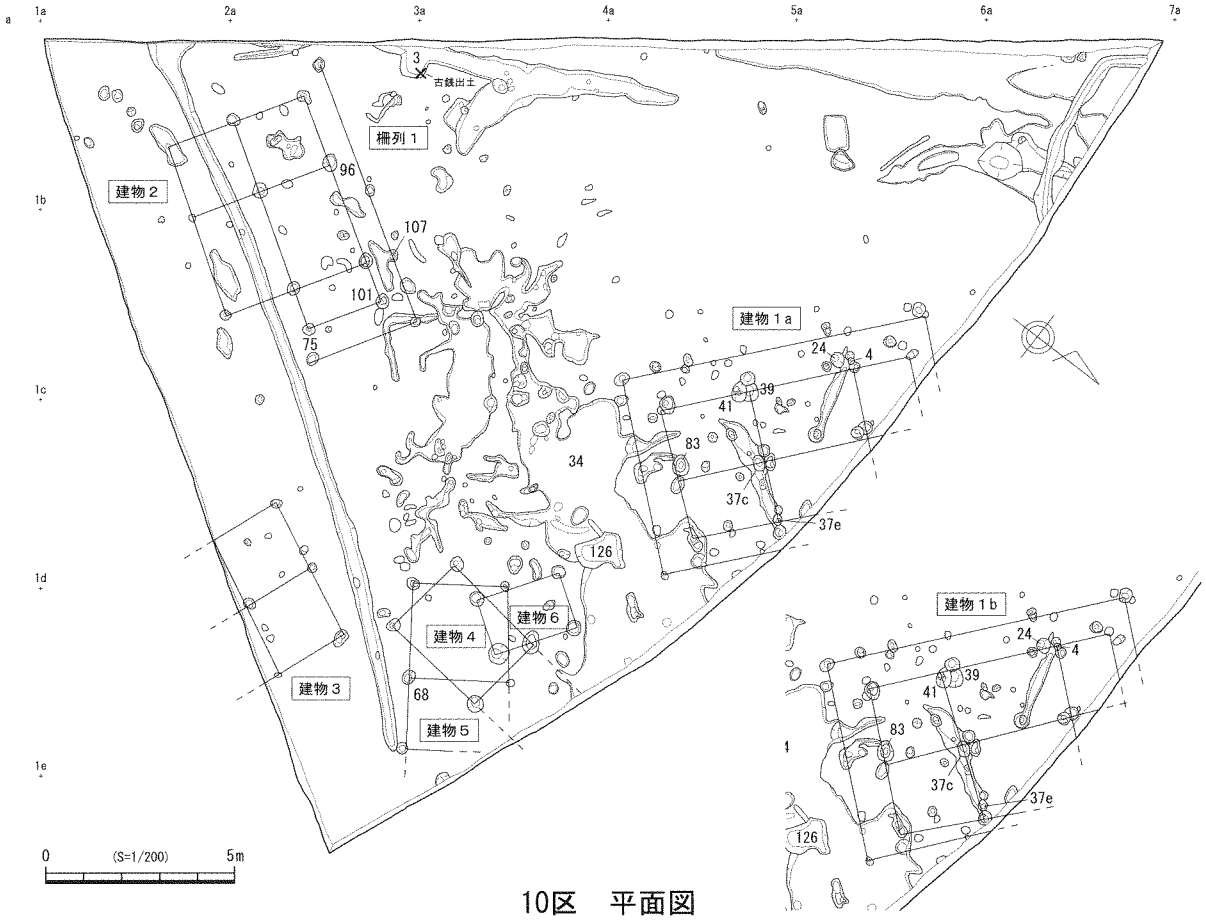
建物３　南北２間×東西１間以上の建物である。方位はN24°Ｅを示す。

建物４　梁行１間×桁行１間以上の建物である。方位はＮ８°Ｅを示す。

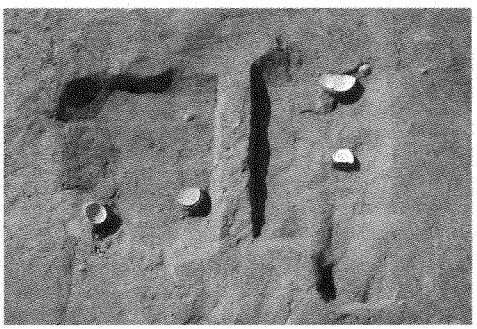
建物５　梁行１間×桁行２間以上の建物である。方位はN55°Ｅを示す。

建物６　１×１間の建物である。方位はN55°Ｗを示す。

土坑126　流路状遺構34を切る。建物１と同じような方位を示す。

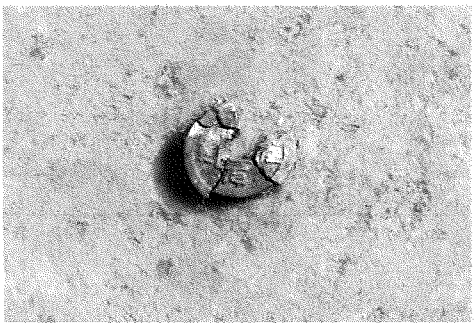


10区　平面図

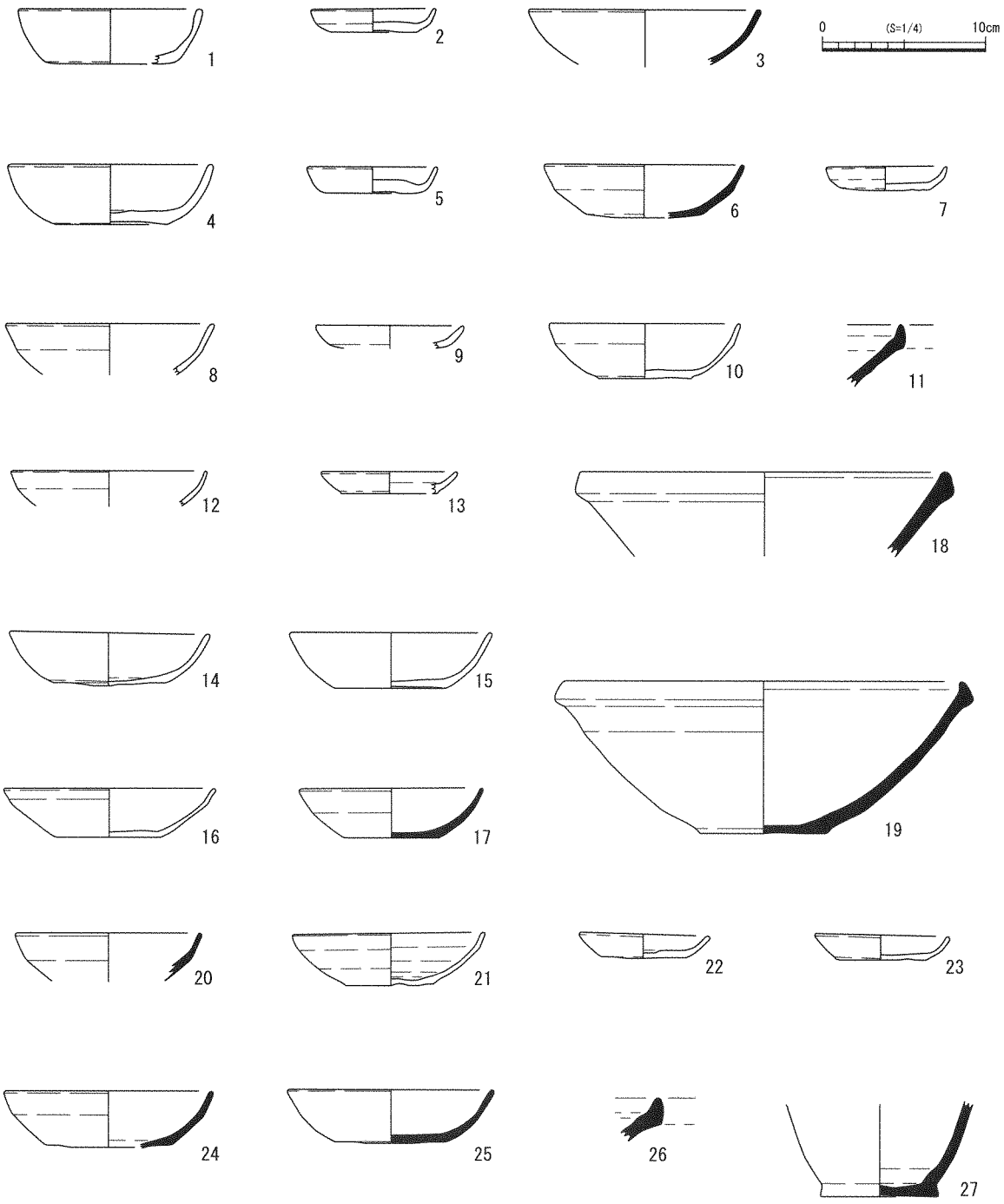


土坑126　遺物出土状況（北東より）

溝３　古銭出土状況（北西より）



建物１b　柱穴４　古銭出土状況（北より）



建物１a　1～3. 柱穴39　4・5. 柱穴37e　**建物１b**　6. 柱穴37c　7. 柱穴41
建物１c　8. 柱穴24　9. 柱穴83　**建物２**　10・11. 柱穴75　12. 柱穴96　13. 柱穴101
柵列１　14・15. 柱穴107　**建物５**　16. 柱穴68
17・18. 溝３　19～23. 土坑126　24～27. 流路状遺構34

10区　出土遺物

建物１柱穴等から、比較的残りの良い供膳土器が出土している。須恵器皿は口径13cm前後の**3・24・25**が古く、口径11～12cmで口縁部を強くナデる**6・17・20**が新しい様相を示し、後者は14世紀中葉～末頃の久保ノカチ遺跡ａ１類（『久保ノカチ遺跡Ⅱ』南あわじ市教育委員会2014）に対応すると思われる。また土師器皿**8**は久保ノカチ遺跡ａ２類（15世紀初頭～前葉頃）に対応すると思われる。すなわち14世紀前葉頃、流路状遺構34が埋め戻され、建物１ａ→１ｂ→１ｃの順に建て替えられ、土坑126は建物１ｂとほぼ同時期に掘削されたと思われる。建物２・柵列１は建物１ｂか１ｃに並行する時期と思われる。その他の建物の時期は不明であるが、15世紀後半の遺物が見当たらないことから15世紀前半には集落の終焉を迎えるようである。供膳具以外に古銭が出土しており、建物１ｂ柱穴４からは、天聖元寳（初鋳1023年）もしくは紹聖元寳（初鋳1094年）、溝３からは大観通寳（初鋳1107年）を含む数点が出土している。

２　まとめ

７区では弥生時代終末～古墳時代初頭の土器を含む溝を確認した。遺跡範囲確認調査を含め、この時期の生活遺構は確認できておらず、大規模な遺構面の削平があったと思われる。

８区では古墳時代後期・奈良～平安時代・中世初頭の遺構を確認した。８区周辺は「昔は寺があり大雨が降って流された」と地元では言われており、字名を「南（みなみ）ノ加市（かいち）」と言う。本来は「垣内（かいち）」であったと考えられ、８区の遺構は何らかの施設の敷地内南部にあった建物群と思われる。特に、調査区西部からは瓦が出土していることから寺院遺構とも考えられるが、出土量が一堂分ではなく、礎石が確認できなかったことから軒先のみ、もしくは一面だけ瓦を葺いた建物であったと思われる。また、くぼ地の整地痕である遺構11からは仏具である水瓶や三足（足部分）が出土し、規模の大小はともかく寺院関連の建物があったことは明瞭である。

尾根先端部に立地する８区と同様の立地状況である後山遺跡でも、８世紀後半～９世紀前半の多量の製塩土器（丸底Ⅳ式）が出土しており、塩生産におけるなんらかの作業を行っていた可能性が指摘されていた。８区での製塩土器の出土状況を合わせると、やはりなんらかの作業を行っていたと考えられる。

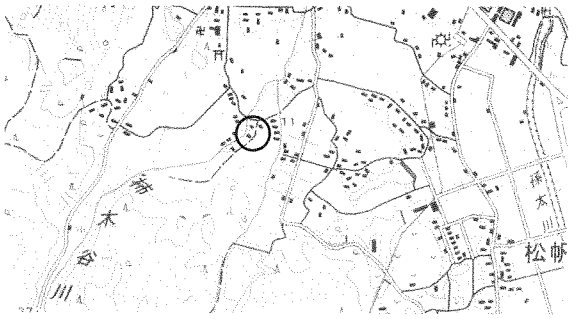
10区では14～15世紀の建物が確認され、四面庇を持つ建物１は８区建物２・12に続く主要な建物であったと思われる。

本遺跡は三原平野と海への玄関口が見渡せられる丘陵部に位置し、これまでに調査された周辺の遺跡群と合わせ考えると、古来より松帆から湊にいたる地域は政治的に重要な土地であったと推定できる。

（定松・的崎・山崎）

6　カマス遺跡　－２次調査－

所 在 地　　湊里字カマス
事 業 名　　経営体育成基盤整備事業
担 当 者　　的崎薫・定松佳重
種　　別　　本発掘調査
調査期間　　平成23年12月14日～平成24年２月９日
調査面積　　1,198.2㎡



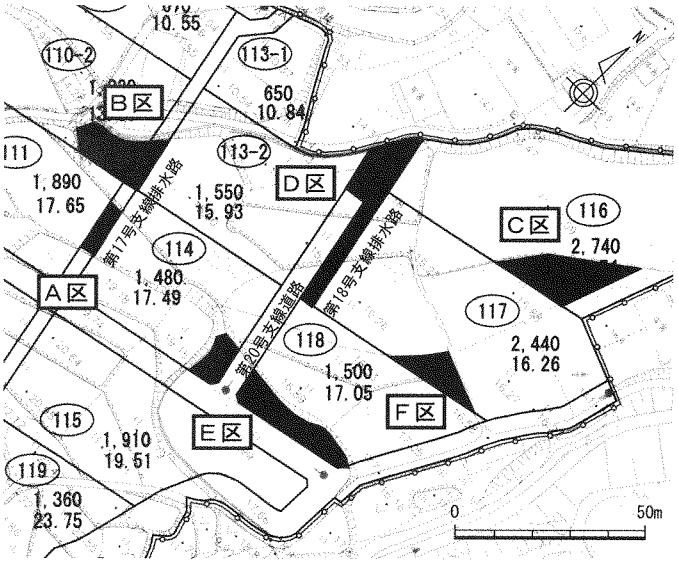
調査の位置

1　調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、大日川と三原川が合流する左岸に位置する。周辺には、柿木谷川を挟んだ北の丘陵に里丸山古墳群や山の口古墳、式内社である湊口神社、里原田遺跡(弥生～江戸時代)、湊城跡（室町時代）、三原川河口には叶堂城跡（室町時代)、南方向には後山遺跡（弥生・平安・室町時代）等遺跡が多く立地する。

平成21年度に実施した遺跡範囲確認調査の成果を基に、事業実施によって遺跡に影響の及ぶ範囲のみ本発掘調査を行った。

以下、主な調査区のみ記述する。



調査区設定図

［C区］

圃場面の調査である。掘立柱建物３棟と溝などを確認した。建物１は調査区の北側に続くと考えられる梁行２間の建物で、柱穴から土師器・須恵器・製塩土器が出土している。建物２は桁行５間・梁行２間で土師器が出土している。建物３は桁行４間・梁行２間で東側に庇が付く可能性が考えられる。柱穴から土師器・製塩土器が出土している。建物２・３は桁行が9.3mと同じ規模であるが、柱間は建物３の方が広く、柱穴が大きい。柱穴の切り合いから建物２→３へと建て替えが行われている。遺物がいずれも小片であるが、８世紀後半～９世紀前半と考えられる。その他の遺構からは黒色土器Ｂ類なども出土していることから、10世紀代の遺構も含まれている。

［D区］

排水路と道路の調査である。調査区南部で掘立柱建物１棟・柵列・土坑などを確認した。建物は桁行３間で調査区外へと続き、東側に庇が付く。建物を囲む柵列が東側と南側にみられる。建物柱穴からの遺物は乏しく、僅かな土師器と須恵器から９世紀前後と考えられる。

［E区］

圃場面の調査である。竪穴住居１棟と掘立柱建物１棟などを確認した。竪穴住居は１辺が4.7mを測り、北西辺中央に竈を持ち、４本柱である。古墳時代後期の土師器と須恵器が出土し、床面では鉄製品を２

点確認した。建物は桁行４間・梁行２間で、桁行の柱間は0.9～1.5mと間隔が不均等で狭い。柱穴からは少量の土師器しか出土していないため明確な時期は不明であるが、竪穴住居と軸を同じくすることから竪穴住居と同時期と考えられる。包含層からは弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・瓦・石鏃・鞴の羽口・石帯・耳環など弥生～鎌倉時代の遺物が出土した。石帯**6**は暗灰色をした蛇尾片である。耳環**7**は径30×27mmで重量は21.8ｇ、中実の銅芯に金と銀の合金薄板を被せている。

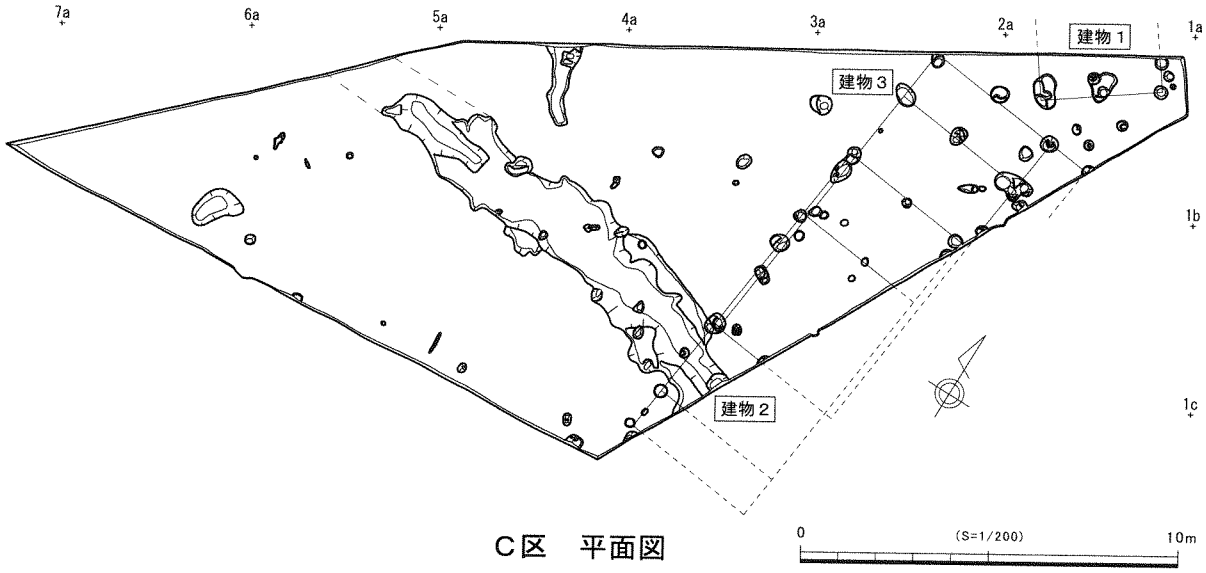
［Ｆ区］

圃場面の調査である。掘立柱建物４棟と土坑などを確認した。建物１は桁行２間以上・梁行２間で、上層より掘り込まれた柱穴で構成される。土師器や白磁の出土から11～12世紀と推測される。地山をベースにした建物２は桁行３間で調査区の南側に続く。建物３は桁行２間・梁行１間である。建物４は桁行２間以上・梁行２間であり、東に庇を持つ。建物２～４の柱穴から時代を判別できるような遺物は出土しなかった。

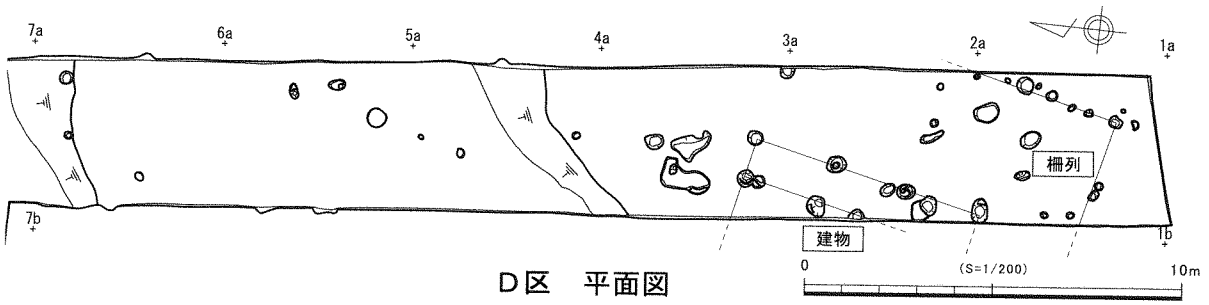
２　まとめ

本遺跡は古墳時代後期と奈良～平安時代の遺跡であることがわかった。古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物、耳環の出土からはＥ区西側の丘陵に古墳が包蔵されている可能性が考えられるとともに、柿木谷川の対岸に立地する里丸山古墳群との関連性がうかがわれる。また、古代においては石帯や灰釉陶器などの官衙的要素の高い遺物が含まれていることから、同じく柿木谷川対岸に立地する里原田遺跡８区の寺院関連遺構と密接な関係があったと考えられる。

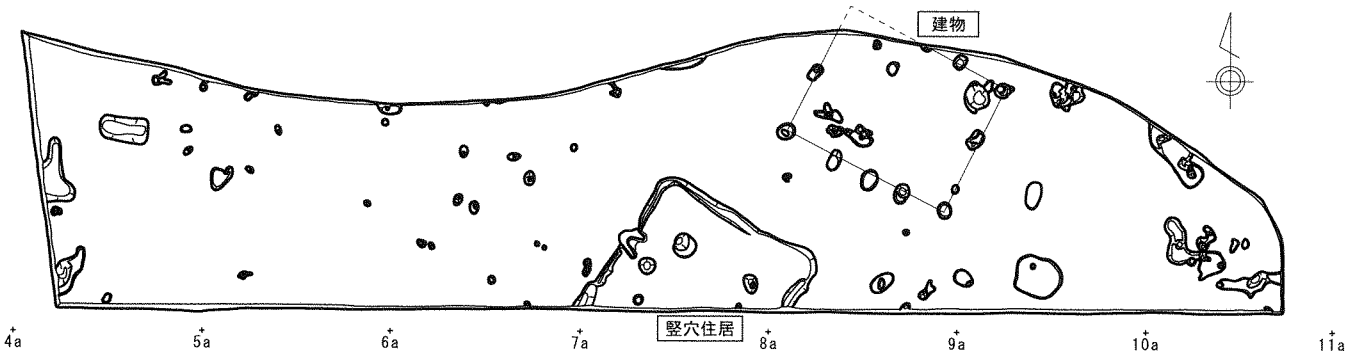
（的崎・定松）



Ｃ区　平面図

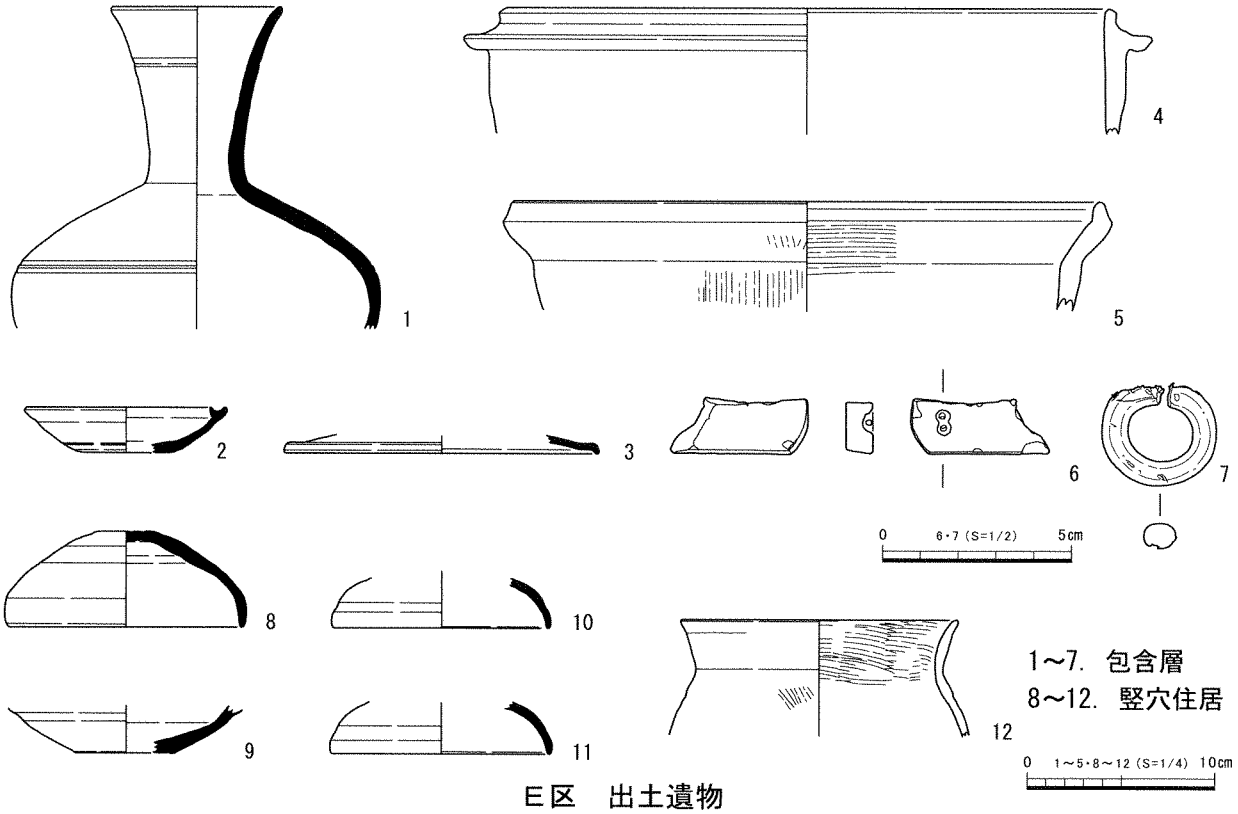


Ｄ区　平面図

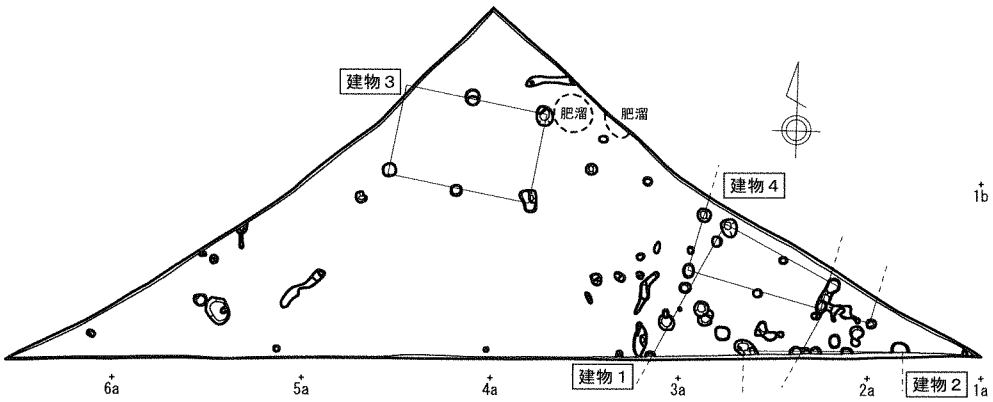


E区　平面図

0　(S=1/200)　10m



E区　出土遺物



F区　平面図

0　(S=1/200)　10m

2015年3月31日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅷ
2011年度　埋蔵文化財調査

発行　南あわじ市教育委員会
編集　南あわじ市埋蔵文化財調査事務所
〒656-0455　兵庫県南あわじ市神代国衙1100
TEL　0799-42-3849
印刷　佐藤印刷
〒656-0501　兵庫県南あわじ市福良甲1006-4
TEL　0799-52-0049